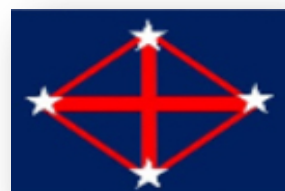


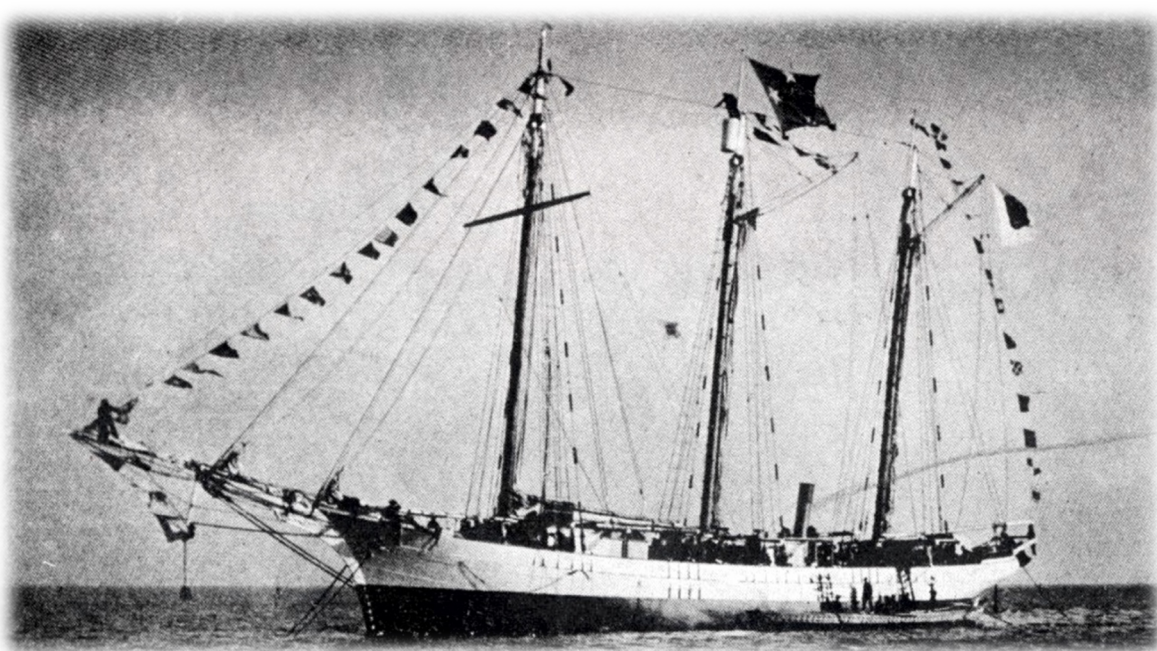
白瀬南極探検隊出航 110 周年記念

秋田県にかほ市白瀬南極探検隊親族調査・交流業務報告書



南極に立った挑戦者たち

～祖先の誇りを永遠に～



2021(令和3)年2月26日
特定非営利活動法人
白瀬南極探検 100 周年記念

■目次

■Prologue:プロローグ	1
■発刊に寄せて	2
■白瀬が南極探検した明治という時代	3
■白瀬南極探検隊員の写真	4
■探検隊員の名簿と出身地	5
■探検隊後援会幹部の名簿	6
■白瀬南極探検隊・後援会 親族調査について	7
■白瀬南極探検隊 式典写真	8
■白瀬南極探検隊とは	9
■白瀬南極探検隊員の紹介(探検隊員)	10
■白瀬南極探検隊員の紹介(船員)	26
■昭和の白瀬南極探検隊	46
■南極観測の歴史(あゆみ)	53
■Epilogue:エピローグ	56
■NP0 白瀬からのお知らせ	57
補足：編集委員紹介	58

■Prologue:プロローグ

NPO 法人 白瀬南極探検 100 周年記念会

理事長 佐々木 松美

白瀬矗（秋田県にかほ市金浦出身）を隊長とする白瀬南極探検隊は、僅か 204 トンの木造帆船で南極海を乗り切り、南極南緯 80 度 05 分に到達し（1912・明治 45 年 1 月 28 日）、その地点を大和雪原と命名。一人の犠牲者も出すことなく、日本に帰還しました。貧弱な装備で極地に足跡を印した白瀬隊の行動は、当時の人々を興奮させ、小さな日本人の大きな勇気と世界から賞賛され、我が国の南極観測の扉を開く端緒となりました。

本年はその偉業から 110 年を迎え、白瀬南極探検隊が礎となった日本の南極観測も 60 年が経過し、オーロラ発生の解明、オゾンホールを発見、多量の隕石採取、そして陸生・海洋生物の研究など世界にほこる多大な成果をあげ、世界の科学の発展に大きく寄与しています。

私達 NPO 法人白瀬南極探検 100 周年記念会は、白瀬南極探検隊の偉業を広く伝え、その功績を顕彰し、青少年にフロンティア精神を培い、教育文化の振興に寄与することを目的に結成いたしました。

時代の経過により偉業を成し遂げた探検隊員、後援会員の親族の皆様は世代交代が進んでおりますが、皆様の祖先の偉業、功績が時節の流れに忘れ去られることがないようにし、そして、遺徳を尊びポリシーを受け継ぎ、白瀬南極探検隊の事績を永遠に伝えていかなくはなりません。

そこで、110 周年を機に皆様の祖先が成し遂げた偉業、功績を再確認し、さらに顕彰するため白瀬南極探検隊記念館と協働で皆様の親族調査を実施したしだいです。

この冊子は単なる親族名簿ではなく、白瀬南極探検隊の偉大な足跡と精神、夢、ロマンを永遠に引き継いでいく指針となるものです。

この調査にあたり親族の皆様から貴重な情報、資料などをいただきましたこと、衷心よりお礼を申し上げます。コロナ禍が収束しましたら、ぜひ白瀬南極探検隊記念館にお越しくださいますようお待ちしております。

令和 3 年 1 月

■発刊に寄せて

にかほ市 白瀬南極探検隊記念館

館長 阿部 和久

令和2年度は、白瀬南極探検隊記念館が開館して30周年を迎えました。これもひとえに、展示・所蔵資料や様々な情報提供にご支援、ご協力を賜りました白瀬南極探検隊員御親族・関係者の皆様のおかげと感謝申し上げます。

さて、一世紀以上前の白瀬南極探検隊の功績に思いをはせる時、私は、彼らの人間的なスケールを考えずにはおれません。…この場合の「スケール」とは、彼らが心に持っていた「尺」或いは「ものさし」のことです。

私ども、現代に生きる市民が日々ミリ単位のことにあくせくしている態度に比べ、特に白瀬蘆は、比較にならないほど大きなスケールで物事を考え実行した人だったのではないかと推察されます。知識も情報も乏しい最果て・南極を目指し、人跡未踏の大和雪原（やまとゆきはら）に到達し無事に帰国、南極の領土獲得を企てつつ億単位の借財を完済し85年の生涯を全うする、こうした超弩（ど）級の人生を送ることが私たちにできるでしょうか。

それは、探検隊員についても同様です。今となっては、公式記録「南極記」をはじめ隊員個々の記録から察するより術はありません。白瀬南極探検隊は大きなスケールを持つ人間たちの奇跡的な結集と思わざるを得ません。こうした人間を生み育んだのは、国の形の未だ定まらぬ明治という時代環境のみならず、隊員個々の血に潜む才であり智でありスケールだったのでしょう。

当記念館としては、白瀬蘆はもとより、110年前に大和雪原到達の偉業を成し遂げた「奇跡の結集」を果たした隊員個々に光を当てるのが、即ち探検の意義の再評価につながるものと考えております。このたび、NPO法人白瀬南極探検100周年記念会に委託して行われた「白瀬南極探検隊員親族調査」が、新型コロナ禍の制約の中、限られた時間のうちに報告書として上梓されたことに敬意を表しますとともに、調査にご協力いただいた探検隊並びに後援会等の親族・関係者の皆様に改めて深甚なる感謝を申し上げます。

今回の調査報告を足掛かりに、白瀬南極探検隊員たちの実像がさらに明確化され、社会の課題を解決するための大きなスケールが提示されることを期待しております。

■白瀬が南極探検した明治という時代

NPO 法人 白瀬南極探検 100 周年記念会

調査専門部会長 佐藤 忠悦

白瀬矗が生まれた文久元年は、幕末体制国家から天皇制国家へ大変革を遂げようとする、まさに明治維新への胎動の時期であった。

世界は大航海時代を経て、産業革命に成功した列強諸国は、市場を求めるとともに植民地政策を進め、その矛先はアジアから中国、日本にも向けられていた。

1866年、薩摩、長州、土佐、肥後の同盟が成立し、徳川慶喜の大政奉還によって、約260年続いた閉鎖的な徳川幕府は終焉を迎える。幕府軍と新政府軍が戦った戊辰戦争が収束したのは明治2年5月であった。

明治新政府が発足し、天皇を中心とする中央集権国家が誕生し、首都名も江戸から東京に代わった。

新政府は世界の現状を把握するため、欧米に使節団を派遣し、廃藩置県、徴兵制、地租改正など大胆な改革を進め、欧米諸国に追いつけ、追い越せと、富国強兵による国造りを進めた。この改革を受け入れた国民も新政府に大きな期待をよせていた。

政治家は国家意識に燃え、軍人は自衛力の増強充実に寝食を忘れて奔走した。『雪原にゆく』の著者白瀬京子は、国際列強に対するライバル意識が先鋭化している背景のもとで、よくもわるくも「日本」、または「日本人」という帰属意識に凝固する時代でもあったと述べている。

日清日露の戦勝と、一連の改革により、日本は世界有数の大国へと成長し、国民の目はそれまで目隠しされていた徳川時代から、一気に海外にまで向けられるようになったのである。そしてなによりも、明治は「日本の青春時代」と言われるように、青年たちが将来に向かって大きな夢を抱いた時代でもあった。中国北東部や南米への移民も、血気あふれる青年たちだったのである。

明治の三代壮挙と言われる郡司大尉の千島探検、福島中佐のシベリア単騎横断、そして白瀬中尉の南極探検はその象徴といってよいだろう。

■白瀬南極探検隊員の写真



隊員集合写真（探検船「開南丸」船上）



隊員・後援会員の集合写真（大隈邸）-凱旋記念-明治45年6月20日

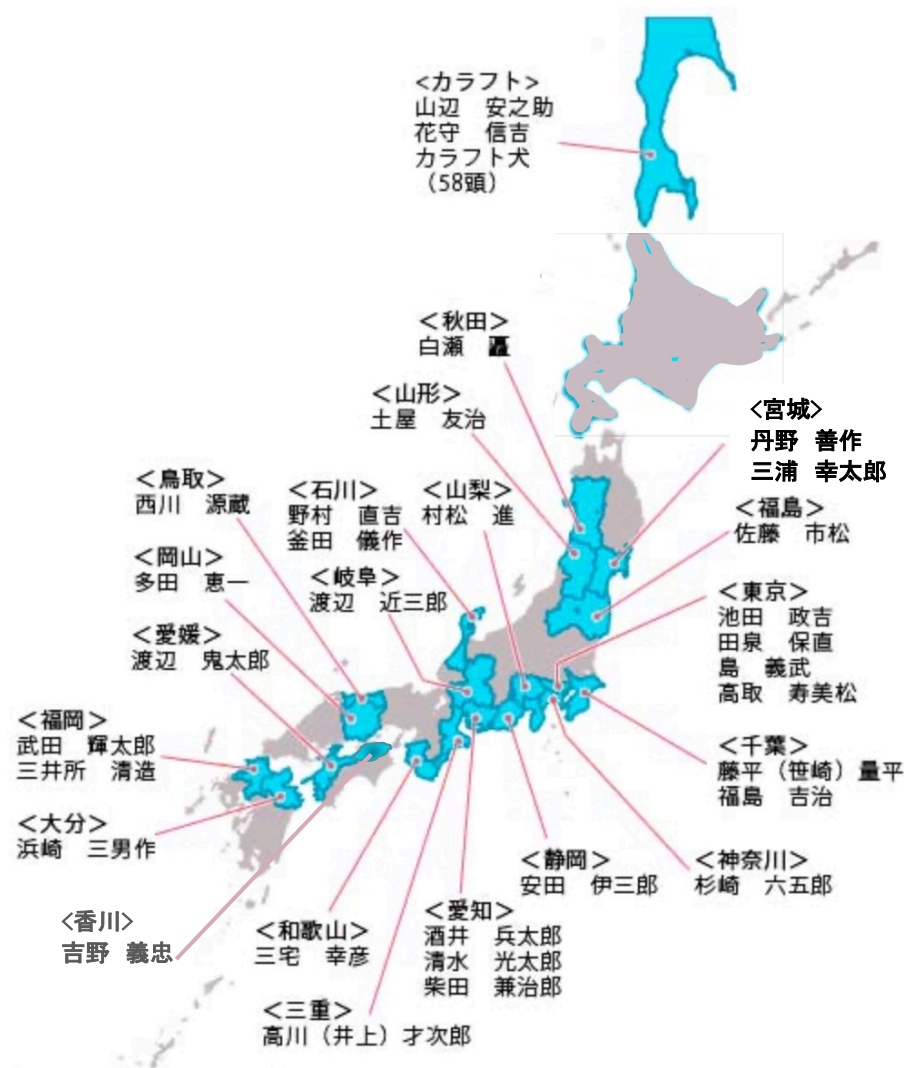
■探検隊員の名簿

役職	氏名	年齢	※出身地	※※次隊
隊長	白瀬 矗	49	秋田県	
学術部長	武田 輝太郎	33	福岡県	
衛生部長	三井所 清造	34	福岡県	
書記長	多田 恵一	28	岡山県	
糧食係	西川 源蔵	24	島根県	
被服係	吉野 義忠	23	香川県	
炊事係	三浦 幸太郎	25	宮城県	①
橈犬係	山辺 安之助	44	樺太	
橈犬係	花守 信吉	33	樺太	
学術部員	池田 政吉	44	東京都	②
写真部員	田泉 保直	23	東京都	②
船長	野村 直吉	44	石川県	
一等運転士	丹野 善作	41	宮城県	①
機関長	清水 光太郎	40	愛知県	
二等運転士	土屋 友治	34	山形県	
三等運転士	酒井 兵太郎	44	愛知県	
事務長	島 義武	30	大阪府	
木工	安田 伊三郎	32	静岡県	
油差	藤平(笹崎) 量平	27	千葉県	
機関士	村松 進	26	山梨県	
水夫長	高川(井上) 歳次郎	31	三重県	
舵取	佐藤 市松	33	福島県	①
舵取	渡辺 鬼太郎	29	愛知県	
舵取	釜田 儀作	27	石川県	
火夫	杉崎 六五郎	36	神奈川県	
火夫	高取 寿美松	35	東京都	①
料理人	渡辺 近三郎	29	岐阜県	
水夫	柴田 兼治郎	20	愛知県	
水夫	福島 吉治	19	千葉県	
見習運転士	三宅 幸彦	27	和歌山県	②
火夫	浜崎 三男作	27	大分県	②

※出身地は生誕地、姓、年齢は探検当時

※※①はシドニーから帰国した隊員、②はシドニーから加わった隊員

各隊員の出身地



■探検隊後援会幹部の名簿

役職	氏名
会長伯爵	大隈 重信
幹事	押川 方義
〃	佐々木 安五郎 (照山)
〃	田中 弘之 (舎身：とねみ・しゃしん)
〃	村上 俊蔵 (濁浪)
〃	三宅 雄二郎 (雪嶺)
〃	池辺 吉太郎 (三山)
事務長	堀内 静宇
主事	武見 喜三

■ 白瀬南極探検隊・後援会 親族調査について

1. 調査経過

2020 年(令和 2 年)

4 月 27 日	親族調査委託事業契約
5 月 18・27 日	事業内容確認
6 月 1 日	工程表決定
6 月 19 日～8 月 24 日	親族調査票・家系図作成
9 月 1 日 ～10 月 1 日	親族調査票・隊員紹介プロフィール作成
10 月 4 日	親族調査票一式の発送 & 回答確認・整理 記録
11 月 2 日	未回答者への催促連絡
12 月 12 日	回答者へ掲載確認の発送
12 月 25 日	回答確認、記録整理、隊員紹介・家系図の確 認作業

2021 年(令和 3 年)

1 月 22 日	調査データベース入力確認、報告書原稿確認
1 月 28 日	白瀬中尉をしのぶ集い。インターネットイベ ント「Team Shirase2021」「デジタル絵本や まとゆきはら」「県民ミュージカル白瀬中尉 物語」上映
2 月 26 日	報告書

2. 調査件数

探検隊員調査親族対象： 8 3 件	回答件数： 5 2 件(60%)
探検隊後援会調査対象： 4 件	不明返戻： 1 9 件(22%)
-----計 8 7 件	回答なし： 1 6 件(18%)

・報告書について

- ※ 調査は、白瀬南極探検隊記念館保管のデータを基礎資料として行いました。
- ※ 家系図は、故人の氏名は掲載していますが、以外は個人情報に配慮して、姓のみ、又は簡易住所の掲載をしています。
- ※ 掲載の写真・イメージ等は白瀬南極探検隊記念館並びに管理者の許諾を得ております。
- ※ 今後、隊員に関する事項やその親族に関する情報等について、広く収集します。
- ※ QRコードでご連絡いただければ幸いです。



■白瀬南極探検隊 式典写真



昭和12年1月10日 港区芝浦埠頭公園に建立された南極探検25周年記念碑の竣工式



昭和58年1月30日 開南丸抜錨記念碑復元記念



平成22年11月28日 開南丸芝浦出航100周年記念式典

■白瀬南極探検隊とは

白瀬南極探検隊の計画が公になったのは、明治43年（1910）7月5日であった。当時東京神田にあった錦輝館の第一回発表演説会において一般に公表された。

この計画は当時著名な名士により賛助され、7月5日に南極探検後援会が組織され、大隈重信が会長となった。

国からの支援は受けられず、朝日新聞社の後援を受け、国民に義援金を呼びかけた。

白瀬隊の出航が遅れたのは、探検費用不足もさることながら、探検船がなかなか決まらなかったのが大きな原因であった。

色々苦勞した挙句に決まったのが「第二報効丸」という199トンの木造帆船であった。

「第二報効丸」は機関を据えて東郷平八郎（海軍元帥）が「開南丸」と命名し、明治43年（1910）11月29日、27名の隊員を乗せ、南極に向け東京港区芝浦を出航した。

明治44年（1911）2月8日、ニュージーランドで飲料水等を調達し、同月11日に出港した。

3月14日、ロス海コールマン島付近で氷海に前進を阻まれ、オーストラリアに引き返した。

5月1日、シドニーに入港、ウラーラ市で木造プレハブ小屋とテント生活で南極の夏を待った。

11月19日、数人の隊員の交代があったが、再び南極に向けシドニー港を出航した。

明治45年（1912）1月16日、午後10時、鯨湾（ホエール湾）に停泊。アムンセン（ノルウェー）のフラム号と出会う。

1月20日、白瀬隊長、武田学術部長、三井所衛生部長、花守、山辺の5名の突進隊が2台の犬ぞりで出発した。

1月26日「開南丸」は東方沿岸部を探検し南緯76度06分、西経151度20分の当時の最東端に到達した。

1月28日、突進隊は午後零時20分、南緯80度05分、西経156度37分に到達、日章旗を掲げ付近一帯を「大和雪原」（やまとゆきはら）と命名し最終到達地点とした。

2月7日「開南丸」は探検を終了し、鯨湾（ホエール湾）から日本に向け出航した。

3月30日白瀬隊長はシドニーから探検の事後処理のため「日光丸」で帰国した。（5月16日横浜着）

6月5日、小笠原群島父島の二見港に寄港。10日に出港。

6月19日、横浜港寄港。20日芝浦港に全員元気に到着し、大隈邸で歓迎式典が挙行された。

一行は、アムンセン（ノルウェー）やスコット（イギリス）のように極点征服はならなかったものの、204トンの木の葉のような木造機帆船で怒涛さかまく南氷洋を乗り切り、外国隊とは比較にならない貧弱な装備で南極に足跡を印したことは、当時の人々を大いに興奮させ、小さな日本人の大きな勇気と世界から賞賛された。

■白瀬南極探検隊員の紹介(探検隊員)

●^{しらせ}白瀬 ^{のぶ} 轟 : 隊長



●データ

白瀬 轟 49歳
秋田県にかほ市金浦
文久元年6月13日生
昭和21年9月4日没

■年表

1861 (文久元) 年

秋田県金浦町(現にかほ市)、浄土真宗「浄蓮寺」の第13世住職知道、マキエの長男として生まれる。幼名を知教。

1869 (明治2) 年

佐々木節斎の寺子屋に入る(8歳)。

1872 年

節斎から北極の話聞き、探検家を志して「5つの物断ち」(酒、たばこ、湯、茶、寒中の火)を始める(11歳)。この戒めを生涯守り通す。

1879 (明治12) 年

東京日比谷、陸軍教導団騎兵科に入団し軍人になり「轟」と改名(18歳)

1881 (明治14) 年

陸軍教導団を卒業、翌年4月仙台に赴任。

1887 (明治20) 年

仙台市の海産物問屋、菅原長兵衛・たまの長女やす(明治5年生まれ)と結婚。翌年長男誕生。以降4男3女をもうける。

1890 (明治23) 年

視察のため来仙中だった児玉源太郎將軍(当時少将)の知遇を得る。白瀬にとって生涯の大きな精神的支柱となる。

1893~96 (明治26~29) 年

将来の北極探検に備えて郡司成忠海軍大尉の「千島探検隊」に加わり、最北端の占守島で穴居越冬、探検。ベーリング海峡を渡りアラスカのエスキモー部落で越冬。('山岳'第31年号「南極探検の思ひ出、白瀬轟」より)

1909 (明治42) 年

アメリカの探検家ピアリー一行が北極点の踏破に成功したことを知り、北極探検から南極探検へ180度転換する。

1910(明治43)年1月

イギリスのスコット大佐と南極点到達レースを争うことを決意し、帝国議会に経費下付請願を提出(予算は認められたものの政府は全く支給しなかった)。5月、東京毎日新聞、萬朝報に白瀬の南極探検計画を報道。7月、東京神田で南極探検発表演説会が開かれ、大隈重信伯爵を会長とする南極探検後援会が発足。資金や船を調達して、11月29日、海南丸が東京品川を出航。

1911 (明治44) 年3月

氷海に前進を阻まれてUターン。5月、オーストラリアのシドニーに入港してテント生活をして南極の夏を待ち、11月19日、シドニーを出航。

1912 (明治45) 年1月28日

西経156度37分、南緯80度05分に日章旗を立て、一帯を大和雪原と命名。2月3日、帰国の途、6月20日、海南丸が芝浦に到着。

1913 (大正2) 年

「南極探検」出版。後援会が「南極記」を刊行。以降1922(大正11)年、「北極から南極へ」、1942(昭和17)年、「私の南極探検記」、1944(昭和19)年、「南極と北極」を出版。

1914 (大正2) 年から

映画、講演旅行、日本全国、満州、朝鮮

南極に立った挑戦者たち

半島、台湾へ行脚。

1946 (昭和 21) 年 9 月 4 日

愛知県挙母町 (現 : 豊田市) にて腸閉塞のため死去。85 歳。

■紹介

明治時代、人生の終盤に差し掛かる 50 歳にして南極に立つ轟… 11 歳からの夢「極地探検」を叶えるためには長い時間がかかった。

18 歳で浅草本願寺の小教校に入学するが、僧職では探検はできないと、すぐに退学。陸軍教導団に入団して、自ら轟と改名する。これは退路を断って、なんとしても北極に行くという決意の表れである。轟 (直が 3 つ) は、この名の通り、自分に課した戒めは一生守り、世の中の理不尽は抗議し、一本気であった。

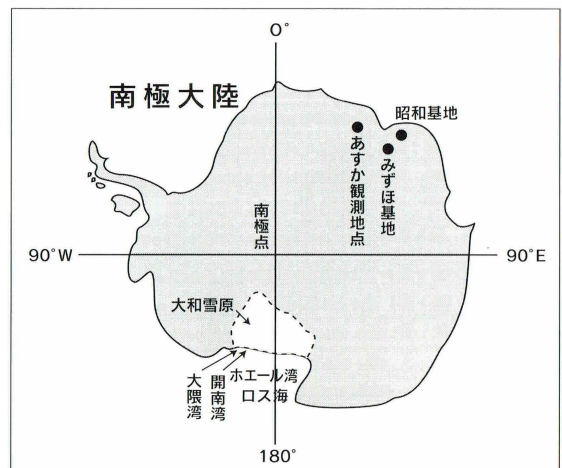
探検家を志す轟を支えてくれたのは 3 人、北極行きの夢実現を陰ながら支えアドバイスくれた児玉源太郎将軍、南極行きを実現させるべく世間の機運を高めてくれた大隈重信伯爵、そして、妻やすであった。仙台で家族を持った轟は間もなく郡司大尉の「千島探検隊」に加わり数年間留守にする。その間、家を守り生活費を捻出したのは、21 歳で 2 人の子どもを育て妊娠中のやすであった。轟が探検に専心できた裏にやすの手腕がある。やすは昼は三味線の師匠、夜は着物の仕立てなどをして子を育て教育し、上の子たちも奨学金で学校に通い、下の子たちの学費や生活費の足しに送金した。

帰仙後、「千島探検録」を刊行し「千島義勇警備田漁兵設置」「千島庁設置」等を帝国議会に請願したり、衆院選に出馬しようと試みる日々で 40 代を迎える。この頃の目標は「北極探検」であったため、何とか北極に近づく道を探ったのであろう。しかし日露戦争が勃発して轟も召集され、探検どころではなかった。

一気に動くのは轟が 48 歳、イギリスのピアリー一行が北極点の踏破に成功したことを新聞で知り、北極から南極へ目標を転換、さらに、イギリスのスコット大佐が再度南極探検に挑むことを知って、轟自身が行動し始めたからである。

帝国議会に探検費用の請願を提出し予算が認められ (実際には政府は一円も支給しなかったが)、新聞社が南極探検計画を報道したことが、明治の市民感情を高揚させた。船の調達が頓挫したり資金集めが困難で、予定した出航日には大幅に遅れたが、今で言う「市民によるクラウドファンディング」で開南丸は品川を出航する。

南極探検の長旅から戻ると、次は借金返済というもっと長い旅に出ることになる。自宅の売却、著書の出版、映画と講演の旅行等で返済し、探検から 23 年後、1935 (昭



▲南極大陸地図

和 10) 年頃には莫大な借財は返し終わった。

轟は講演旅行で移動するだけでなく、居住地も様々変えて、一所に長くいることはなかった。三男が用意してくれた隠居所にも 3 年いただけである。終戦後、疎開先の秋田県金浦の郷里から埼玉県新座市の自宅に戻るが、1 年足らずで、二女タケコ母子と共に京都を経て愛知県挙母町に行き、ここで亡くなる。タケコは若い頃、講演旅行にも同行していて、轟と一番気の合う子だったのだろう。

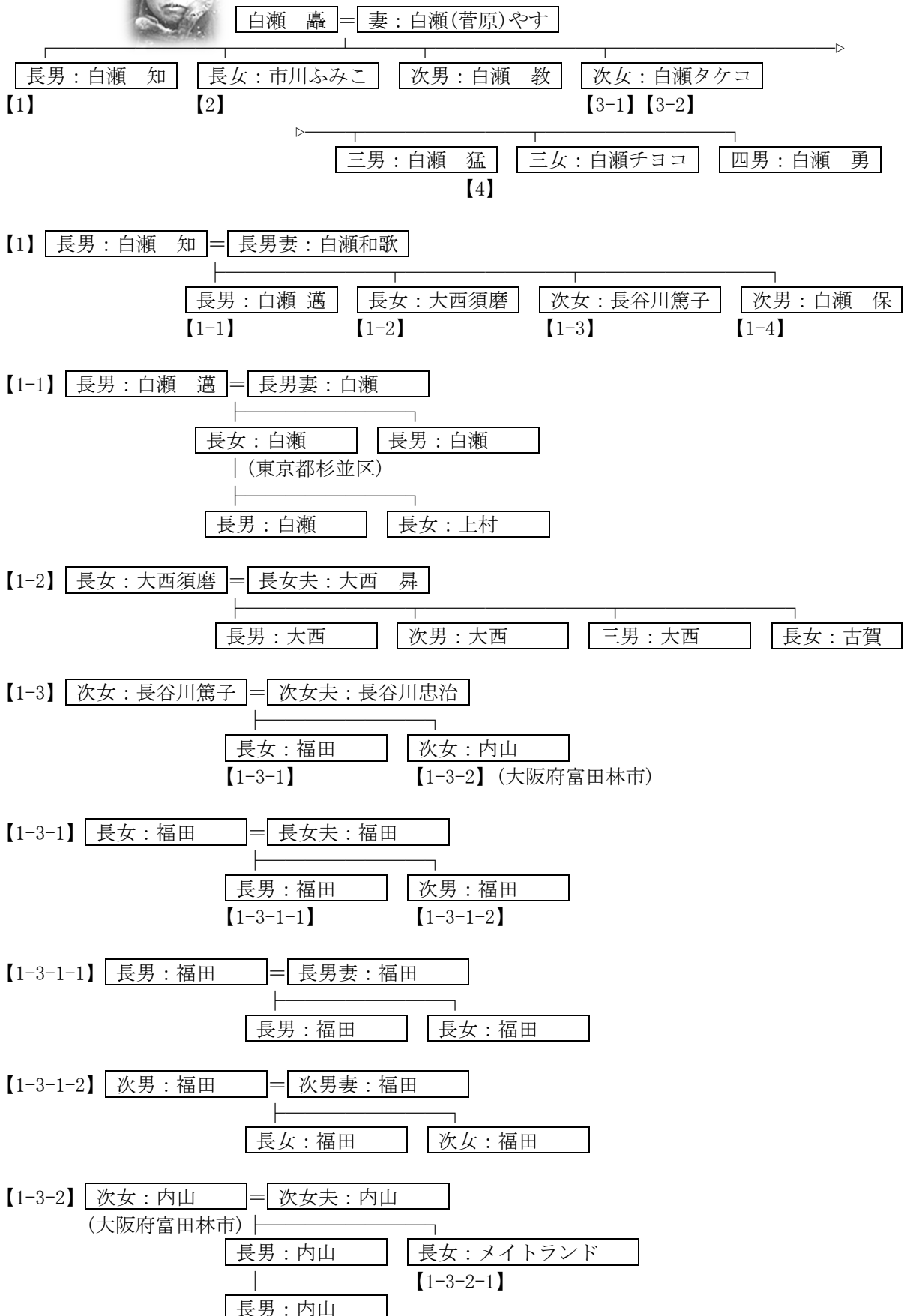
愛知県吉良町の西林寺、秋田県にかほ市の浄蓮寺、横浜市の日野公園墓地にお墓がある。

■参考文献

「雪原に挑む白瀬中尉」 渡部誠一郎著
(秋田魁新報社)

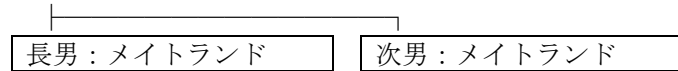


※家系図の氏名については個人情報に配慮しました。

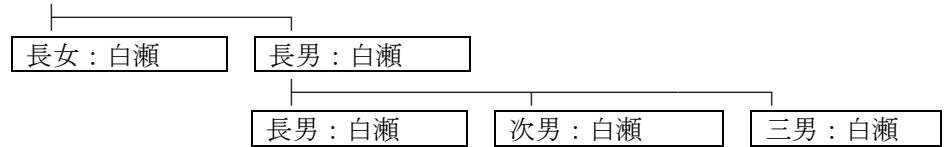


南極に立った挑戦者たち

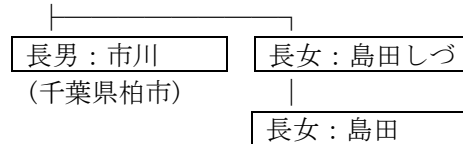
【1-3-2-1】 長女：メイトランド = 長女夫：メイトランド



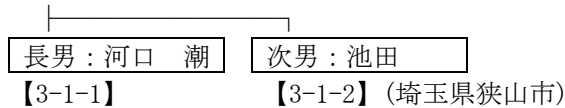
【1-4】 次男：白瀬 保 = 次男妻：白瀬三代子



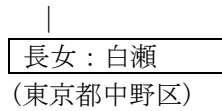
【2】 長女：市川ふみこ = 長女夫：市川藤市



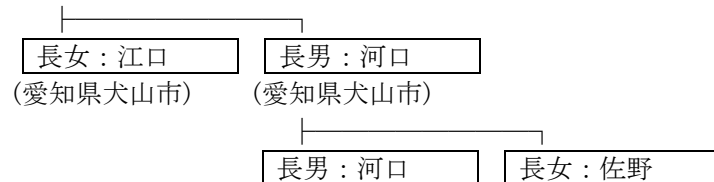
【3-1】 次女：白瀬タケコ = 次女前夫：河口 楸



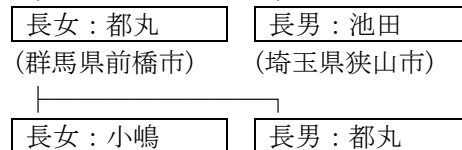
【3-2】 次女：白瀬タケコ = 次女後夫：札元一作



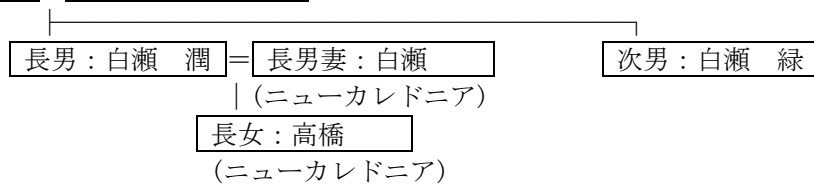
【3-1-1】 長男：河口 潮 = 長男妻：河口



【3-1-2】 次男：池田 = 次男妻：池田
(埼玉県狭山市)



【4】 三男：白瀬 猛 = 三男妻：白瀬梅子



ただ たけるたろう

●武田 輝太郎：学術部長

■紹介



武田文造、カツの長男として福岡県京都(みやこ)郡城井村字(現犀川町)字横瀬759に生まれる。

幼時に節九村、有村千秋に漢文を学ぶ。自然科学に興味を持ち、熊本第五高等学校で地質、地文学の教室助手として地質学を五年間学ぶ。

熊本九州学院を卒業後、明治31年地文科中等教員試験合格。

明治32年、福岡県東築中学校(現東築高校)教諭を拝命。京都(みやこ)中学校、熊本中学校赴任後、明治43年白瀬南極探検隊に入隊。日本気象学会員 天文気象、動物、植物を研究した経歴あり。

探検に当たり、東京天文台の一戸博士、中央気象台の中村台長、岡田理学士より極地における天測などの実習の指導を約一ヵ月にわたり受ける。

寒さにより測量機器が誤作動する中、これまでの実践を活かし、天測などによる突進隊の正確な行動を克明に記録し、南極探検学術日誌、学術研究誌を残す。

探検後は、横浜で陶器の制作工場や貿易会社経営。

大正11年福岡県より衆議院議員選挙に立候補。

●データ

武田 輝太郎 33歳
福岡県
明治12年3月27日生
大正14年10月16日没



みいしよ せいぞう
●三井所 清造：衛生部長

兼写真部長



●データ

三井所 清造 34歳
福岡県
生年月日不明
昭和22年2月14日没

■紹介

福岡県出身 東京薬学専門学校卒業 剣舞を得意とし、柔道の達人でもある。

多田隊員の眼や、隊員の盲腸炎を手術する。柔術で鍛錬した体力は、自分の体重より重い荷物をどんどん運ぶのには感心する。
（「南極探検記」より）

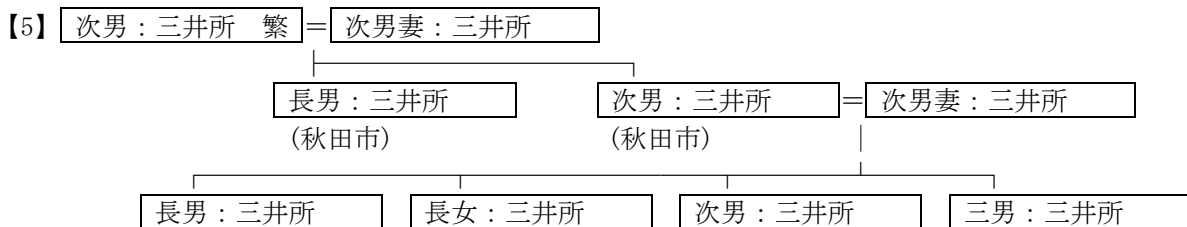
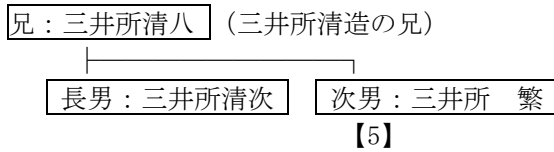
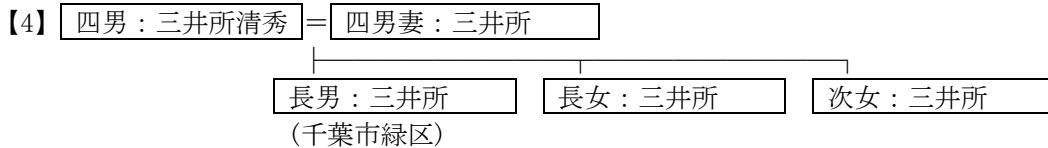
温厚なタイプで真摯で几帳面。全ての隊員から信頼される。「此の人は諸事注意し、良人であることを明言してもよい」野村船長談

白瀬隊長がシドニーから一足先、帰国したため、隊長代理を務め、明治45年（1912）6月20日東京芝浦港に無事帰還。

探検後「花王石鹸」に入社し、工場長となる。

東京都荏原区小山町に「ペンギン堂薬局」を開設。太平洋戦争中は、マレー半島ジョホール州デビスにできた「昭和ゴムkk」の工場長兼油脂部長を務める。





ただ けいいち

●多田 恵一：書記長



●データ

多田 恵一 28歳
ペンネーム (多田春樹)
岡山県
生年月日不明
昭和34年10月17日没

■紹介

出身地 岡山県御津郡エヨ三村揚恵。
 日露戦争に騎兵として従軍。生還した後、
 その拾った命を何か痛快な事業に投じて、
 国利民福に尽くしたいと考えた。

大隈重信伯爵と親交あり、白瀬矗と最初に
 面会した隊員 (明治43年6月)。

出航に当たって心境を次のように詠んで
 いる (明治43年11月29日)

芝浦のしばし爰にたちわかれ

ゆくへはいづこしらなみのはて

多田という人物の筆まめさは敬服の一語
 に尽きる。「南極探検日記」、「南極探検実録」
 を著わす。航海中、船内誌「南潮」を発行す
 る。

南極探検隊隊歌 多田 作詞

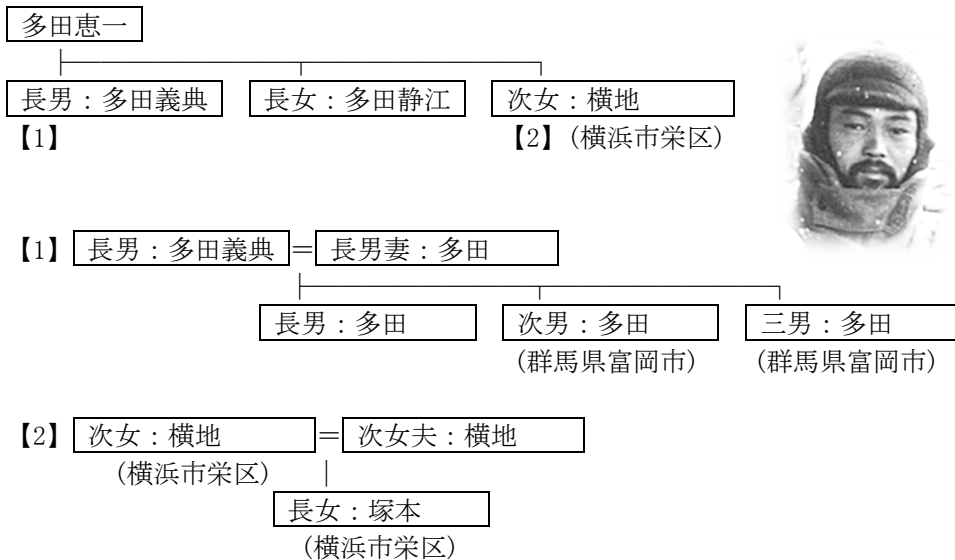
さして行衛は南の
 地軸の果ての大氷野
 船は名に負う開南の
 重き任務を載せてゆく
 棹す海路千辛の
 寄するも何を恐るべき
 迫る山河萬難の
 迫るも争で厭はやむ

愛猫家で開南丸の船内で猫名「タマ」を飼
 っていたが、事故死。

開南丸船上では、得意の尺八を奏し、詩吟
 を誦し将棋は隊員中一番強く、右に出る者
 はなかった。

帰航時、花守にカタカナを教える。

探検後は、東京第二公園にあった芝区青年
 会館に「開南探検協会」事務所を設置した。



にしかわ げんぞう
●西川 源蔵：食糧係



●データ

西川 源蔵 24歳
鳥取県
明治20年4月21日生
大正14年7月16日没

■紹介

西川増蔵・つなの二男として生まれた。西川源蔵は早稲田大学在学中に探検隊に参加。南極では氷岸に上陸用の足場を作るなどの作業に従事し白瀬隊長のホエール湾から突進隊を送った後、同湾からさらに東のエドワード七世州ランド方面の沿岸探検に当たった。

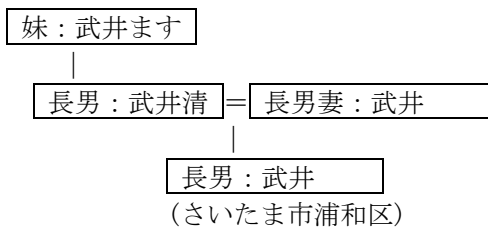
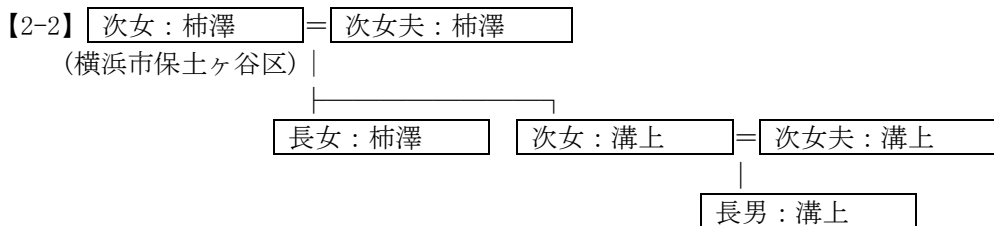
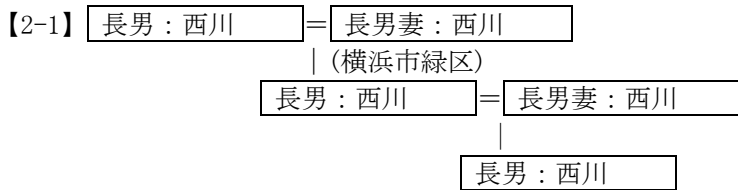
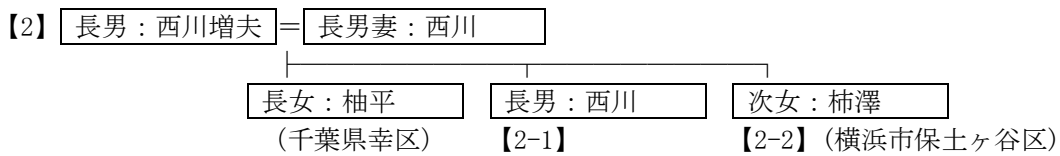
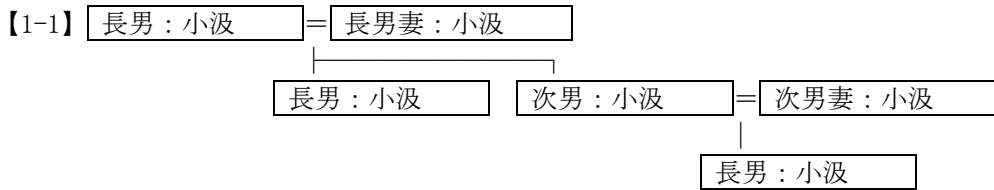
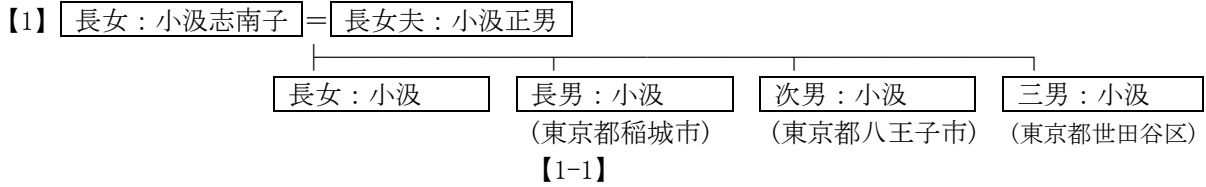
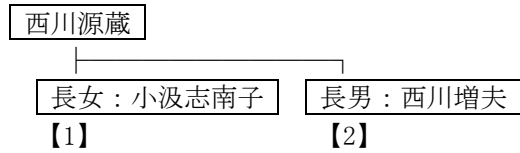
岐阜出身の賄長渡辺近三郎と七世州の内陸16キロまで入り、アレキサンドラ山脈の山すそに「大日本南極探検隊沿岸隊上陸記念標」（木製）を建てるとともに、付近一帯を写真撮影し、そのアレキサンドラ三峰の八合目まで達した。

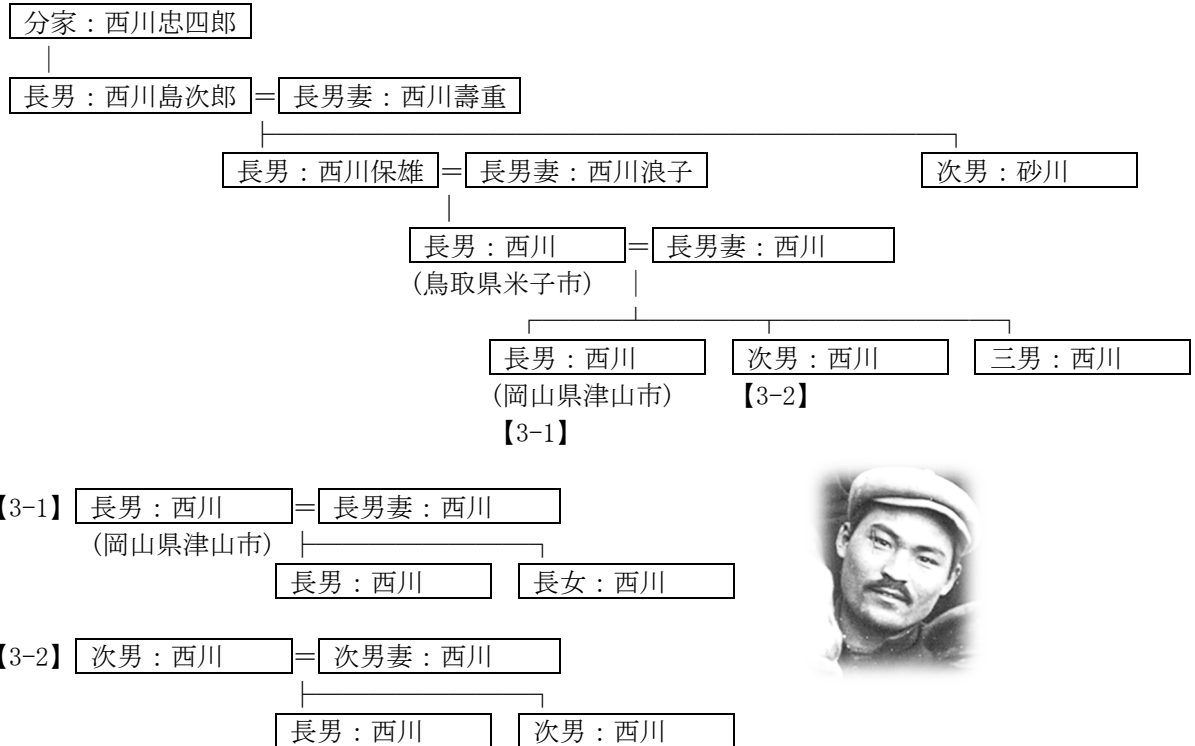
西川源蔵と渡辺近三郎の二人の帰船が遅いために、一時捜索隊を組織する騒ぎがあった。西川源蔵の踏破距離は約60キロにのぼる。

探検後は鳥取県内で講演会を開いたり、中央で舞台協会のマネージャーを務めたりしたが、大正14年7月16日38歳の若さで病死した。

■参考文献

「雪原に挑む白瀬中尉」 渡部誠一郎著
平成3年4月23日増補第3刷 秋田魁新報社
「日本海新聞」 昭和60年12





●吉野 義忠：被服係



●データ

吉野 義忠 23歳
香川県
生年月日不明
昭和33年1月29日没

■紹介

吉野義忠は香川県から北海道の増毛町に移り住んだ開拓移民だったといわれ、当時早稲田大学の学生で、学内にあった※「力行

会」の会員だったこともあり、探検隊に参加した。

吉野は被服係を担当し、南極に突進隊とともに上陸。ホエール湾根拠地、南緯78度33分、西経164度22分にテントを張り、村松進隊員と突進隊が帰還するまで気象観測をおこなった。

探検後、南極探検はロックフェラー財団からも援助を受けていたため、報告のために（大隈の依頼か？）大正2年（1913）米国・ロサンゼルスに渡った。同年帰国した吉野は同じ増毛に住む花子（昭和46年70歳死去）と結婚した。

しかし、米国での暮らしが忘れられず、移住することを決めた。だが、妻の花子はトラコーマのために横浜の検疫所で渡航が認められず、一人で米国に向かわざるを得なかった。

大正10年1921に再度妻を迎えに来たものの許可は得られなかった。以来数年に一回の割で妻子を訪ねる一方、生活費や洋服、おもちゃなどを郵送したが、ついに家族水入らずの生活はできなかった。

その後、米国で皿洗いから農園経営、ホテル業で成功した吉野は昭和30年ごろに米国の生活を清算し帰国。妻花子、長女悦子、

二女栄子らと再会したが、2, 3日で別れを告げ昭和33年、死期を知ってか移り住んだ故郷の丸亀で一人寂しく亡くなった。71歳

二女の田中栄子の思い出は「頑固で曲がったことのきらいな一徹の父。孫にあたる私の娘らによく南極探検の話していた」という。「おじいちゃんの時は、足のつま先に唐辛子の実を入れて赤ゲット(毛布)でくるんで氷の上を歩いた。今の探検(南極観測)はピクニックみたいなもの」とよく語っていたという。

※「力行会(りっこうかい)」は、1897年(明治30年)島貫兵太夫(しまぬき へいだゆう)牧師(東北学院英語神学部第1期卒業生)によって創立、日本は海外移住の指導

をする機関が少なかったため、苦学生へのホーム開放に始まり、日本人の海外への発展と重要性を訴えながら「渡米部」「日米女学校」「日米実業学校」など関連教育施設を創立したり、「渡米新報」を発行するなど、苦学生及び移住希望者に幾多の便宜を与えた。

■参考文献

北海道新聞(昭和57年1月10日、1月13日)

北海道新聞(昭和59年7月4日)

早稲田大学校友会設立125周年記念「南極100年展」パネル

アサヒグラフ新年特大号1956

力行世界 平成25年4月15日

吉野義忠

長女：南波悦子

次女：田中栄子

姉：吉野

長女：吉野

長男：吉野

次男：吉野

= 次男妻：吉野

長男：吉野

みうら こうたろう

●三浦 幸太郎：賄係①



●データ

三浦 幸太郎 25歳

宮城県

明治19年9月23日生

昭和42年5月10日没

■紹介

1910(明治43)年7月5日に東京神田錦輝館で白瀬隊の南極行きの発表会があり、その場にいた三浦は探検隊隊員を希望し、近所に住む三浦と親しかった麻布第一連隊長西郷虎太郎からの紹介状で白瀬と会った。

東大で身体検査があり、その時に梅干しの種を歯で砕いて採用された。出航前には南極探検隊の事務所の芝浦「月見亭」で白瀬隊長から刃渡り9寸の短刀を渡され小指先を切って、親指に血をつけて血判をとったが、血判を拒むものはその場で採用取り消しとなった。

シャクルトン、スコットなどの記事を新聞で読

南極に立った挑戦者たち

み開南丸が余りに小さいので脱退した者もだいたいいた。

航行中一番困ったことは飲料水であった。海南丸には四角のコンクリート製と木造のタンクが2つ用意されていたが、船が揺れるたびにコンクリート製のタンクはコンクリートが壊れ水に混ざり白い水となり、木製は防腐目的に中を焼いていたので黒い水となった。

毎朝コップ一杯の水をもらう列をつくるときに、それぞれ「白」とか「黒」とか言って渡すが、コンクリート臭い白は一番嫌われた。

コップ一杯の水で飲み、洗い、うがいをするという節水ぶりで、白瀬隊長といえども順番を待った。

第一次探検時に脳溢血をおこし病後の衰弱が復さず、シドニーから帰国した。

※1946（昭和21）年頃、マッカーサー元

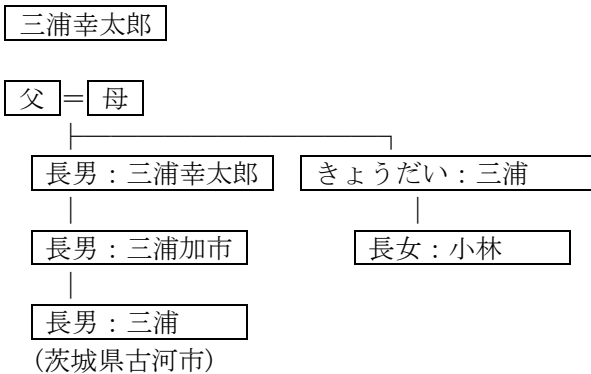
帥に南極領土について白瀬中尉と一緒に会見した。日本の南極領土は侵略してとったものでなく、学術的なもので戦争に関係ないという旨を述べると元帥は「了解した」というので、「口頭でなく、書面にてお答えいただきたい」という「OK」と言われた。その書面は白瀬隊長の手元にあると思う。と当時の探検隊の実績を「世界文化地理体系 月報 第24号 オセアニア・南極編 7人の白瀬隊長を語る」で述べている。

※白瀬轟がマッカーサーと会見したとの記録は残っていない。

※墓は東京都港区三田 明福寺

■参考文献

「世界文化地理体系月報 第24号オセアニア・南極編」
7人の白瀬隊員は語る



●山辺 安之助：樺犬係



●データ

山辺 安之助 44歳
アイヌ名：ヤヨマネク
樺太(現サハリン州)
慶應3年生
大正2年7月9日没

■紹介

樺太(現サハリン州)) 弥満別に生まれる。
黒田清隆樺太庁長官に随同行した経歴あり。
明治8年、樺太千島交換条約により、北海道対雁(現江別市)に移住。
明治26年 帰島し、佐々木漁場
('丁': かくちょう) で働く。
明治37年2月、日露戦争において日本軍

が樺太に上陸した際、日本軍のため斥候及び敵軍の偵察を行い、日本軍を勝利に導く。その功績により勲8等瑞宝章と一時金70円を賜る。一時金については全額、村に寄付する。

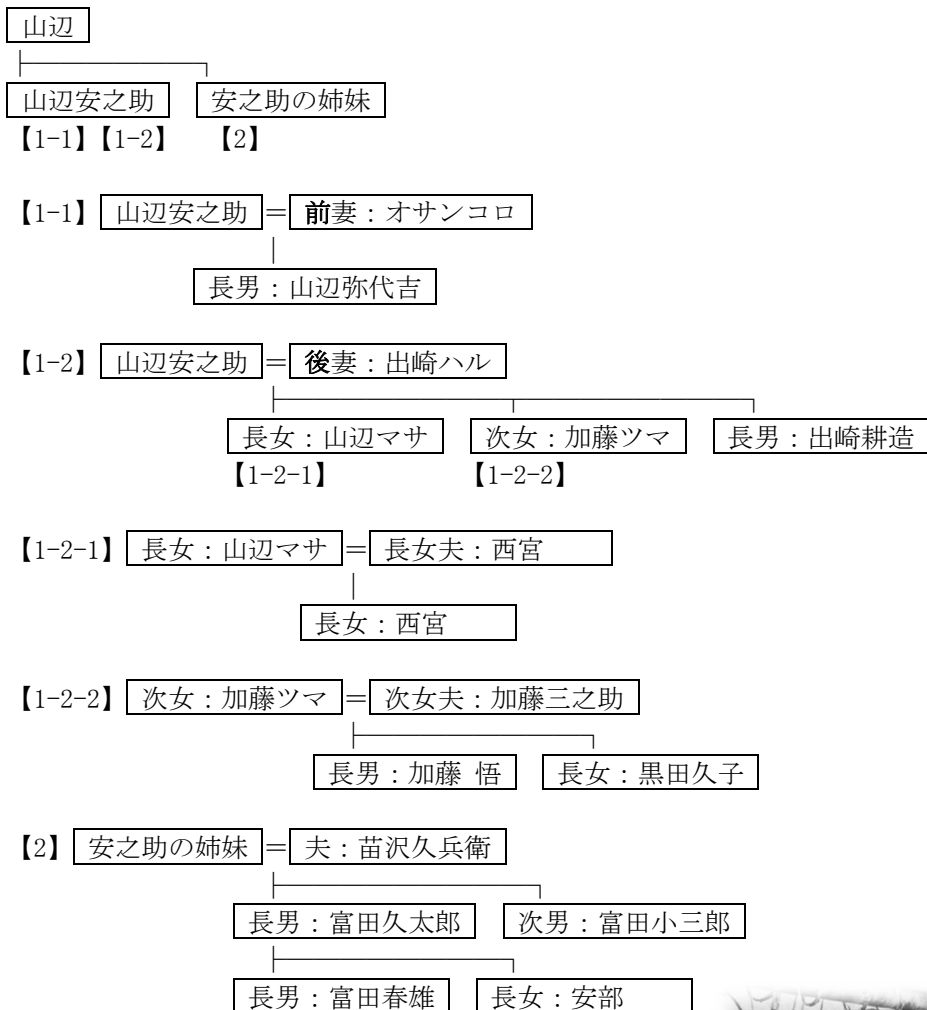
明治43年9月、白瀬南極探検の話聞き、樺太犬の樺太系として参加。参加にあたり、日露戦争を生き抜き子供たちのため学校を建設した山辺は、もう一度日本のため働くのであれば本望と述べ、探検隊に加わることを決意。またアイヌ民族を見直してもらいたいという一心からの探検隊参加であっ

た。

性質温厚にして、真摯な人柄は信頼も厚く、隊員から愛された。

金田一博士は山辺のことを「真摯熱烈の人」と呼び、探検後に博士と『あいぬ物語』を編纂。

「アイヌ、アイヌと一口に言わせまい、アイヌの中に俺がいる」と自負するように、同族の奮起と差別と貧困から救うため、学校を建設するなど、アイヌの地位向上に身を挺して実践した生涯だった。



はなもり しんきち

●花守 信吉：樫犬係



●データ

花守 信吉 33歳
アイヌ名：シシラトカ
樫太(現サハリン州)
明治7年生
昭和25～30年に没

■紹介

樫太多来加の総代の末裔として生まれる。
代々総代の家系で探検後も総代を務める。
アイヌの言語学者知里真志穂博士に、多来加の説話を口述。

日本名は日露戦争後に大谷本願寺法主が樫太出張の際随行していただいたという。

敷香支庁長の勧めもあって、樫太犬10頭を引き連れ探検隊に参加。

天性無邪気で、愛嬌があり探検隊中の人気者であった。

白瀬の著書「南極探検」に山辺安之助と共に、性質温厚にして従順素朴にいたっては密かに学ぶところがあったと記している。

航海中、海水を汲み上げ風呂の準備をするのは花守の役目だった。南極に上陸した明治45年1月16日、クレパスに落下、土屋運転士に救われる。

突進隊の一員として、山辺とともに樫犬の馭者として、犬の世話、隊員の食事をつくる。

南極探検から帰国した花守は、大隈伯爵夫人に新聞紙に包んだ光沢のある南極鷹の羽を贈った。夫人は花守の素朴な心遣いに感心し、良い記念になると礼を述べている。

生年月日については、小樽新聞では、明治12年(1879)ごろ。金田一京助のメモによると明治7年(1874)とある。

北海道大学犬養哲夫教授によると、昭和25年(1950)～昭和30年(1955)まで生存。

花守信吉 【1】【2】

- 【1】 花守信吉 = 前妻：ナイロ (死別)
- └── 長男：花守信太郎 長女：花守花子
- 【2】 花守信吉 = 後妻：サダ (離別)



いけだ まさきち

●池田 政吉：学術部員②



●データ

池田 政吉 44歳
東京都
慶應元年12月28日生
没年不明

■紹介

出身地は東京市牛込区赤城下町53番地。
 札幌農学校農業科卒業。

明治37年8月、三省堂発行「日本百科大辞典編纂に従事。

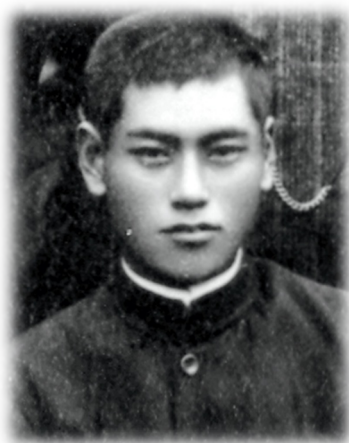
大正2年、南極探検隊後援会長大隈伯爵より、南極探検事業報告を委託される。

(各地学校巡回)

白瀬隊は日本に帰国してすぐ、明治45(1912)年8月18日英国地理学会に日本南極探検の報告をしている。報告したのは池田政吉であることが英国に残っている資料からわかる。

たいずみ やすなお

●田泉 保直：写真部員②



●データ

田泉 保直 23歳
東京都京橋区
明治21年9月22日生
昭和35年10月4日没

■紹介

アムンセンやスコット隊の映画撮影に刺激を受けた多田恵一(書記長)は後援会会長の大隈重信に映画撮影の技師派遣を要望。大隈は当時親しくしていた映画会社M・パ

テー商会社長梅屋庄吉に技師派遣を依頼した。

梅屋は当時社員であった田泉保直を撮影技師として派遣することとし、撮影機材も無料提供することとした。

梅谷は当初自分の弟子というべき技師男沢肅を指名したが、人気シリーズものの撮影があり手が放せないと、男沢の助手であった田泉に依頼した。

南極への参加希望者はだれもなく、先輩の人たちからも断られ「映像の映りには文句を言わない。ただ機械を回していればいい」そして「月給は80円やる(当時の月給は4円50銭)。1万円の保険をつけてやる。不幸の場合は5千円を機械の損料として会社で取り、残額5千円は遺族にやるから行け、行かなければクビだ」と脅かされ承諾した。

明治44年(1911)9月中旬に日本郵船「熊野丸」で横浜港を出航し10月中旬シドニーに着き、すぐ開南丸で南極に向かった。南極では沿岸隊としてエドワード7世ランドを回って1週間位で鯨湾の上陸地点に帰った。1912年2月14日に南極鯨湾出帆し、3月23日ウエリントンに寄港。日本郵船「日光丸」で日本に帰国した。撮影機は英国製撮影機ワーウィック(40キ

南極に立った挑戦者たち

ロ前後) (アメリカ製ウィック 200 フォート巻、と書いている資料もある?) レンズはツアイス(ドイツの有名レンズメーカー) F 3.5 をというものでした。と後年回想している。

田泉の撮影した映画は青山御所で皇太子(大正天皇)、皇太子妃、皇族の前で上映された。

そして、明治45年の浅草国技館での上映を皮切りに全国で上映されました。白瀬も後年借財返済のためにこの映画をもって全国を講演して回った。

探検後は日活となった会社に復帰し、その後は大和音影株式会社、神田劇場、松竹合名会社鎌田撮影所などの撮影技師として従事。

大正13年には独立してアジア映書社創立。シネマパーク開業。昭和5年東京青山6

丁目(青山学院隣)に写真材料店を開業したが戦災により焼失。昭和20年福島県岩瀬郡濱田村(現須賀川市)に妻のぶ子、姪の渡辺朔子を連れて疎開し、昭和35年10月同地で死去した。享年71歳。

■参考文献

「福島民報」昭和56年(1981)11月14日
「7人の白瀬隊員は語る 世界文化地理体系月報(百科事典の付録?)」平成26年3月4日
ニュージーランド協会関西代表 呉橋真人寄贈
「田泉保直白瀬南極探検隊映画撮影記録」
国立近代美術館・フィルムライブラリー

田泉保直

父 = 母

長男：田泉保直 = 長男の妻：田泉 宣

きょうだい：

長女：田泉 (孫?)
(千葉県習志野市)



■白瀬南極探検隊員の紹介（船員）

のむら なおきち

●野村 直吉：船長



●データ

野村 直吉 44歳
石川県羽咋郡一の宮
慶應3年9月7日生
昭和8年10月17日没

■紹介

本名、西東直吉。野村こと西東直吉は慶應3年（1967）9月7日西東勘右エ門・きよ夫婦の二男に生まれた。若い頃から船乗りとなり、日露戦争では御用船の船長として活躍し、独学で甲種船長免許を取り、神戸市の国際汽船会社の「ヨーロッパ丸」の船長として欧州航路に就航した。

南極探検を新聞で知った野村は「自分は給料など望まぬ。探検船の船長たる名誉を全うすれば、足れりである」と白瀬中尉に参加

を申し込んだ。

野村船長の操る木造汽帆船「開南丸」（204トン）は明治43年11月29日、東京芝浦港を出港した。明治44年3月14日ロス海コールマン島沖（南緯74度16分、東経172度7分）まで到達したが氷海に前進を阻まれ、オーストラリアのシドニーに引き返した。白瀬隊がシドニーで南極の夏を待つ間、野村は再征資金や船具を確保するために一時日本に帰国し、10月18日豪州航路の熊野丸でシドニーに帰着。翌11月19日に再挑戦のため出帆。明けて明治45年1月16日予定地ロス海ホエル湾に到着した。南極突進隊を待つ間、「開南丸」は野村の指揮のもとに沿岸などで学術調査を行い西経151度20分、南緯76度6分まで東進した。これは当時の新記録であった。突進隊が帰還したのち、2月4日ホエル湾を出航し明治45年6月20日、一人の犠牲者を出すことなく東京・芝浦に帰還した。出帆以来1年7か月の長旅であった。

探検後は遠洋航路、欧州航路、米国航路などの大型汽船の船長として活躍し、晩年は築港関係の仕事にもかかわり、昭和8年10月17日東京足立区千住で病氣療養中心臓マヒで逝去した。満66歳

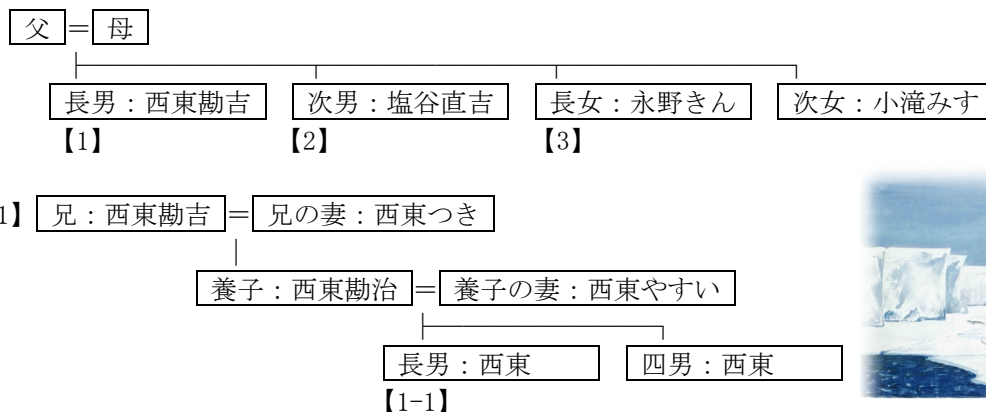
■参考文献

「雪原に挑む白瀬中尉」

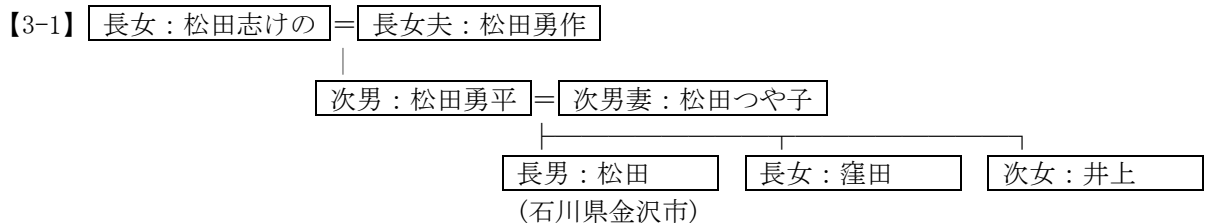
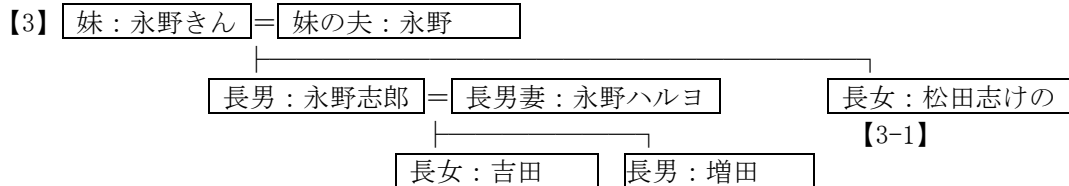
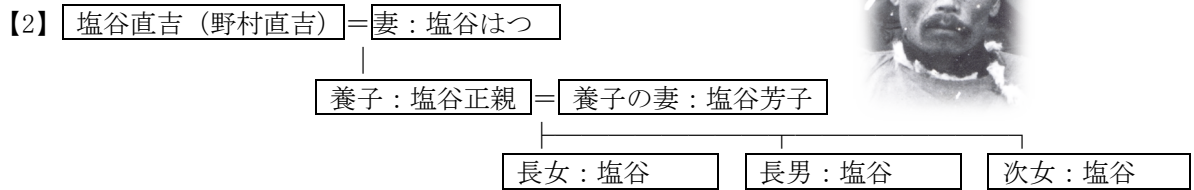
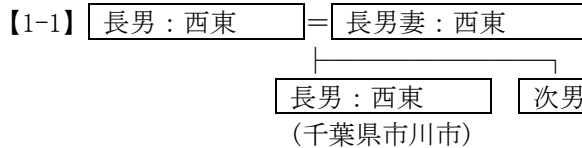
ベールを脱いだ 開南丸船長 野村直吉

渡部誠一郎著 平成3年4月23日

増補第3刷 秋田魁新報社



南極に立った挑戦者たち



たんの ぜんさく

●丹野 善作：一等運転士①



●データ

丹野 善作 41歳
宮城県石巻市渡波
明治4年11月2日生
昭和18年1月20日没

■紹介

一次隊での行動

船員の中では、一番最後に採用が決まる。
 野村船長を補佐し、副船長に近い立場にあ

ったと推測される。シドニー滞在中に、日記風の「思ひ出乃儘 (思い出のまま)」を記している。探検後は、民間船舶の船長などを務め、72歳の時に佐賀県唐津港で仕事中に倒れ死去。

丹野の二次隊への不参加の理由については明らかにされていないが、一次隊の撤退後、隊員たちは様々な葛藤を抱え、不平不満も噴出したようである。その中で、その矛先が、撤退の判断を提言した野村船長と一等運転士である丹野に向かったようである。多田恵一探検隊書記長 (当時) の著書「南極探検私録」の中では、大筋として「野村直吉船長と丹野一等運転士の専横的行動について、われわれ隊員として黙過できないことが起きた。それはシドニー到着の際だった。…(中略) ついに両氏の排斥問題が持ち上がったのである。」と記している。

このことについては、開南丸のシドニー入港後、野村船長と多田の二人が日本郵船で一時帰国した際、問題の解決を探検後援会の幹事会議にまで持ち込んでいる事実からも、極めて深刻な問題だったと推測される。この事態に対して大隈重信伯は、白瀬の報

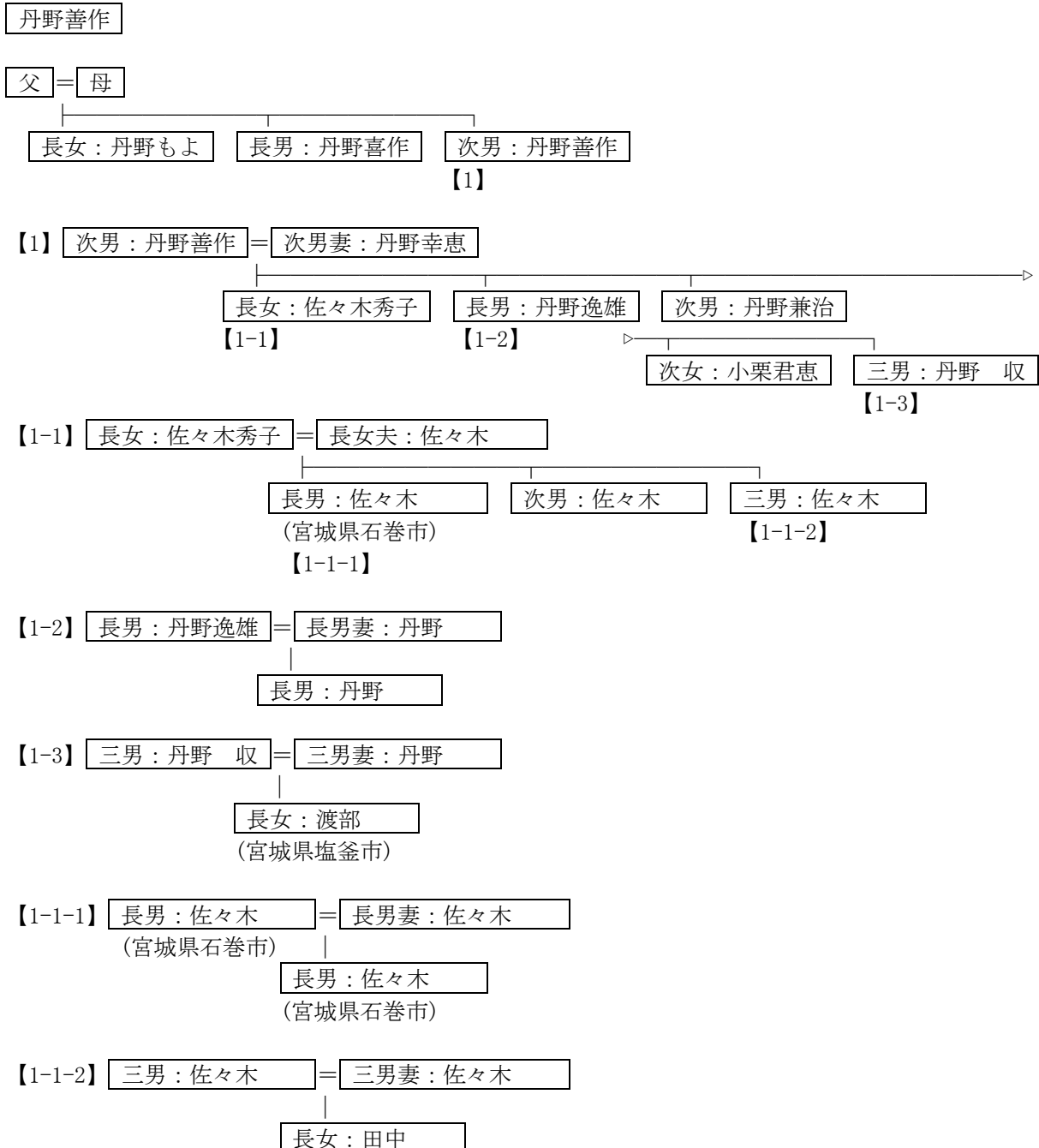
告書を見、多田の報告を聞いたうえで、「いま排斥などの処置をなすべき時ではない。内紛は断然止めなくてはならぬ。」と説諭し、野村と丹野は留任と決定した。しかし、丹野は結局シドニーで下船しており、この問題と無関係ではなかったと推測できる。

参考文献

「南極記」 南極探検後援会長 大隈重信

「南極探検私録」 多田恵一

「雪原に挑む 白瀬中尉」 渡部誠一郎



しみず こうたろう

●清水 光太郎：機関長



●データ

清水 光太郎 40歳
愛知県碧海郡棚尾村
明治8年4月27日生
昭和20年8月8日没

■紹介

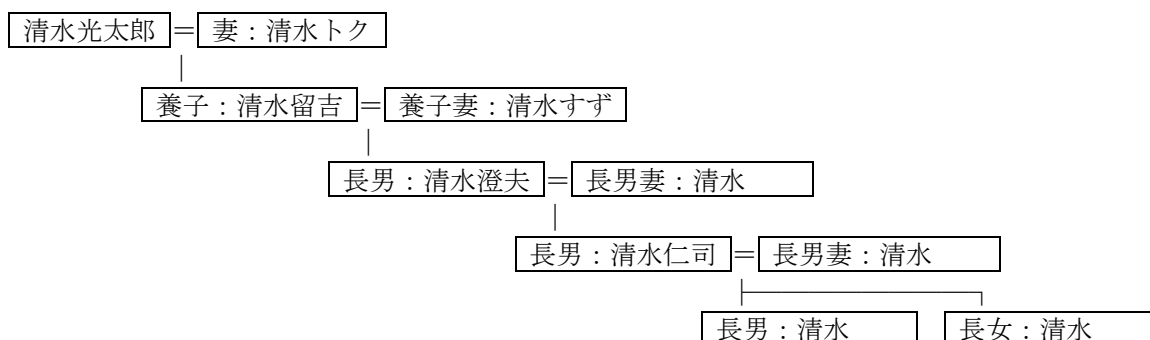
幸太郎は、清水家の長男として明治8年4月27日に生まれた。棚尾村（現碧南市）は古くは遠浅の海で砂浜が広がり、東は海で入江を形成していた。このような環境で育った幸太郎は、夢を海に託し、明治41年独学で一等機関士免状を取得した。

品川高等海員養成所長の紹介により、探検隊に加わった。隊員の中で相撲が一番強かった。

白瀬南極探検隊では機関長として活躍し、探検後は、幸海丸の機関長や、港湾の仕事を経て昭和20年8月8日死去した。

■参考文献

一等機関士免状 逓信大臣男爵後藤新平
 明治41年8月5日
 南極探検船「開南丸」機関長辞令 伯爵
 大隈重信 明治43年11月23日
 幸海丸機関長辞令 大正8年8月22日
 高島紹介高島幸雄
 産直ニュース 産経新聞



つちや ともじ

●土屋 友治：二等運転士



●データ

土屋 友治 34歳
山形県西田川郡賀茂村
明治11年5月22日生
昭和6年1月19日没

■紹介

明治11年（1878）、山形県西田川郡加茂村（現鶴岡市加茂）、漁業を営む土屋鶴吉、兼（屋号與助）の三人兄弟の末っ子として生まれた。当時の加茂は天然の港湾として湾内には汽船が停泊し、日本郵船の西回り航路の寄港地にもなっており、はしけが

出入りしていた。このような環境に刺激を受けた友治は夢を海に求め、丸木舟で単身加茂港から約40キロ離れた飛島へ渡ろうと試みたこともあった。

水夫時代から苦学勉強して海技資格の取得に励み、甲種二等運転士となり、東洋汽船の四等運転士としてサンフランシスコ航路「アメリカ丸」の機関士となった。明治41年（1908）7月、小樽木材会社所属の「第二小樽丸」に運転士として乗り組んだ。この船の船長矢嶋栄太郎は日露戦争当時、野村直吉と御用船に乗り組んだ間柄だった。また、友治は二十歳代の頃に日本郵船の「熊野丸」や「八幡丸」でオーストラリアやマニラ方面の南半球航海経験者であり、白瀬隊長にとっては心強い存在であった。このこともあり、八嶋や野村の推薦で南極探検員に採用された。「開南丸」では副船長格として野村船長を補佐し、安全航海の陰の大きな支えとなった。

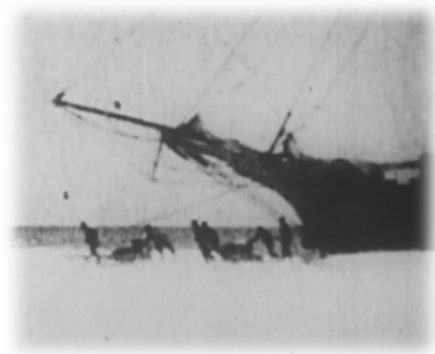
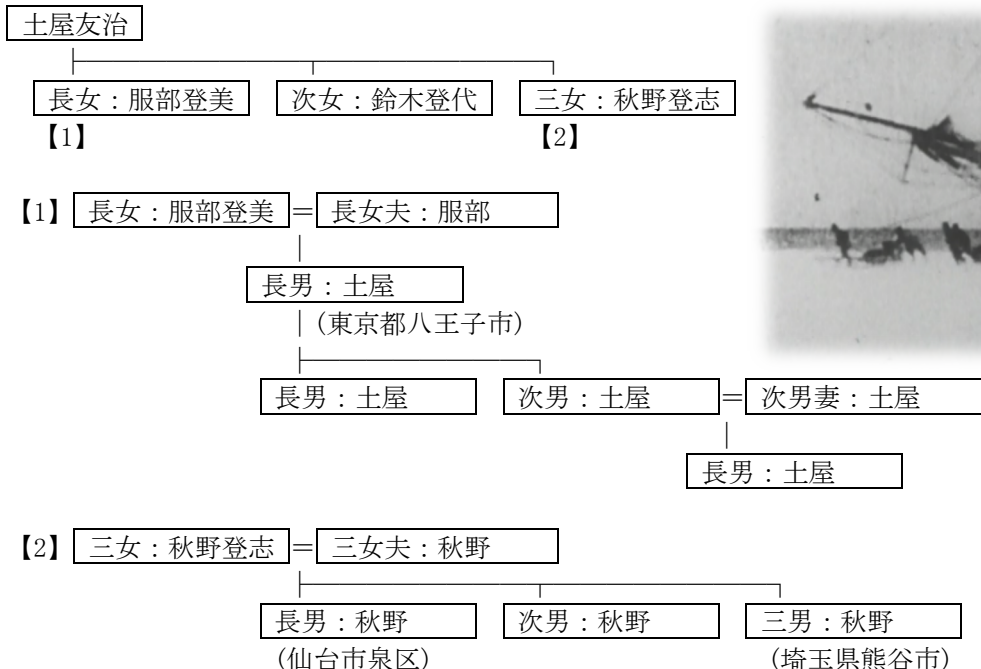
探検後は東和汽船、東洋汽船などに入社、サンフランシスコ航路の「明洋丸」に乗り込むなどし、大正15年（1926）12月に船員生活を引退した。昭和2年（1927）

4月から横浜の海事協会に入り高等船員係として勤務。昭和6年（1931）1月18日に脳溢血で倒れ、翌19日午前3時ころに自宅で死去した。満52歳。

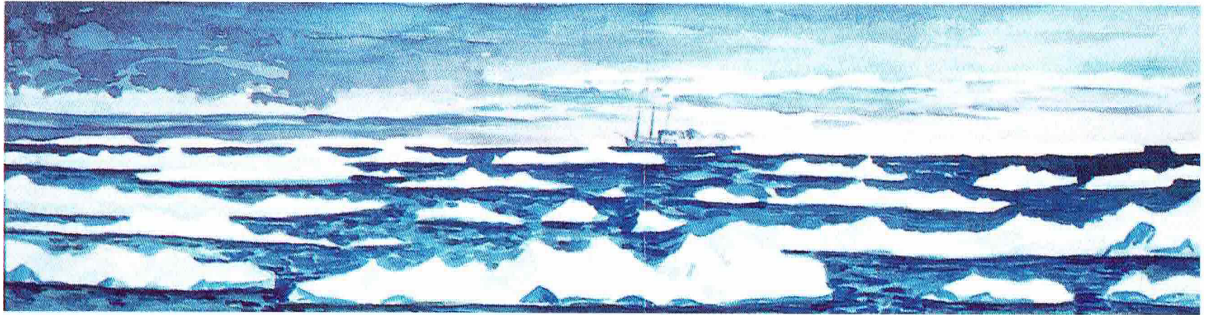
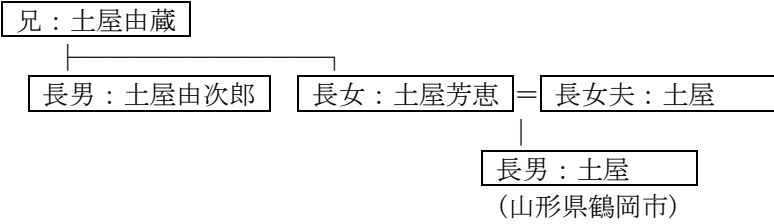
酒をこよなく愛したほか、追分節をよくし、倒れた時も追分節を歌っていた時のことだったといわれている。面倒見のよい人で、彼の世話になった後輩マドロスは5千人の多きにのぼるという。友治の遺徳をしのぶ郷里の有志が昭和34年（1959）1月3日、その胸像（鶴岡市高島町、平田鎌吉制作）を加茂公民館正面玄関に建立、除幕（その後、山形県立加茂水産高校の前庭に移転）。台座には第1次南極観測隊長永田武筆による「白瀬南極探検隊員 土屋友治君之像」の文字がある。

■参考文献

鶴岡日報 昭和6年（1931）1月21日
土屋友治胸像裏面説明文 郷土の先人・先覚
142＜土屋友治＞
荘内日報社 昭和64年（1989）4月
秋田さきがけ 平成4年（1992）5月20



南極に立った挑戦者たち



氷山と開南丸 (8.8×35.6cm)

さかい へいたろう

●酒井 兵太郎：三等運転士



●データ

酒井 兵太郎 44歳
愛知県
明治2年3月14日生
昭和12年6月26日没

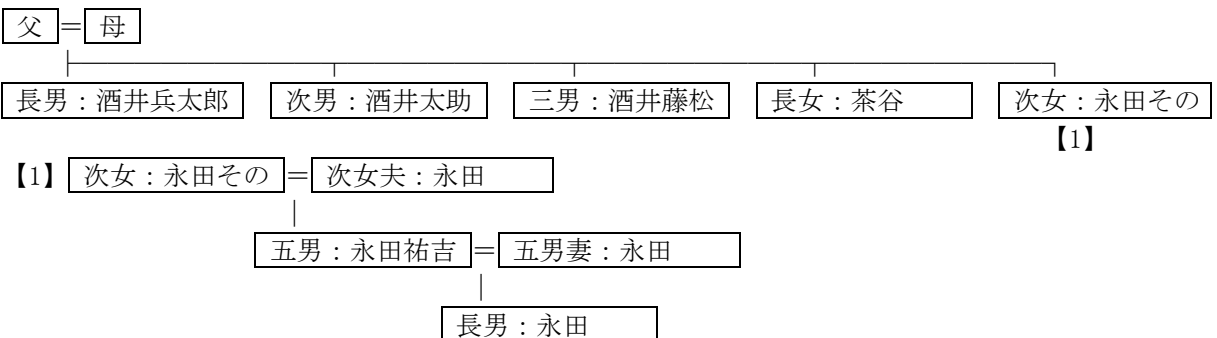
■紹介

酒井権左衛門、妻りよの三人兄弟の長男として生まれた。

■参考文献

みちのくサンスポ

酒井兵太郎



しま よしたけ

●島 義武：事務長



●データ

島 義武 30歳
福島県
明治14年7月5日生
昭和37年3月14日没

■紹介

福島県宇多郡立谷村字北山162に生まれる。幼名 伏見清五郎。

明治30年4月8日、遠縁にあたる相馬郡松ヶ村大字原釜字大津144 島家に入籍。

明治33年7月 日比谷中学校卒業

大正5年6月 神職教習科卒業(皇典講究所)

縁あって、大隈伯爵の書生となり、早稲田大学や国学院で学ぶ。

探検隊に参加した動機として、次のように述べている。「南極探検によって前人未発の智聞を世界に伝えることは、至極危険なことではあるが、男子として雄壮にして豪快な事業といわねばならぬ」

事務長ということもあって、シドニーでは、ドッグに入っている開南丸船内に宿泊。

帰国後、「南極探検と皇大神宮の奉斎」を著す。終生、天皇中心主義の提唱者であった。

昭和33年(戌年)当時土師田八幡宮宮司であった島は、発起人となり「南極皇化忠犬慰霊碑」建立を企てるが実現しなかった。

墓地 東京都中野区沼袋 禅定院

島 義武

父：伏見安次郎 = 母：伏見ハツ

長女：伏見

次女：伏見

三女：伏見

長男：伏見義武

次男：伏見

【1】

三男：伏見

養父：島 庄助 = 養母：島

【1】養子：島 義武 = 養子の妻：島

長男：島

次男：島

島義武の甥（きょうだいの名前は不明）

甥：伏見義雄 = 甥の妻：伏見

長男：伏見

長男の妻：伏見

(福島県相馬市)

長女：伏見

やすだ いさぶろう

●安田 伊三郎：木工



●データ

安田 伊三郎 32歳
静岡県
出生不明
没年不明

■紹介

情報探索しています。ご協力いただければ幸いです。
(NPO 事務局)

ふじひら りょうへい

●藤平 量平：油差



●データ

藤平 量平 27歳
千葉県
出生不明
昭和28年8月3日没

■紹介

義太夫を得意とした。
帰国後に、笹崎家に養子となる。

笹崎(藤平)量平

長男：笹崎一郎

【1】

次男：笹崎壽郎

【2】

三男：笹崎三郎

【1】 長男：笹崎一郎 = 長男妻：笹崎

長女：吉田

|(横浜市青葉区)

長男：吉田

次女：江口

(横浜市港北区)

【2】 次男：笹崎壽郎 = 次男妻：笹崎よしえ

長女：豊島

(千葉県南房総市)

【2-1】

長男：笹崎量一

【2-2】

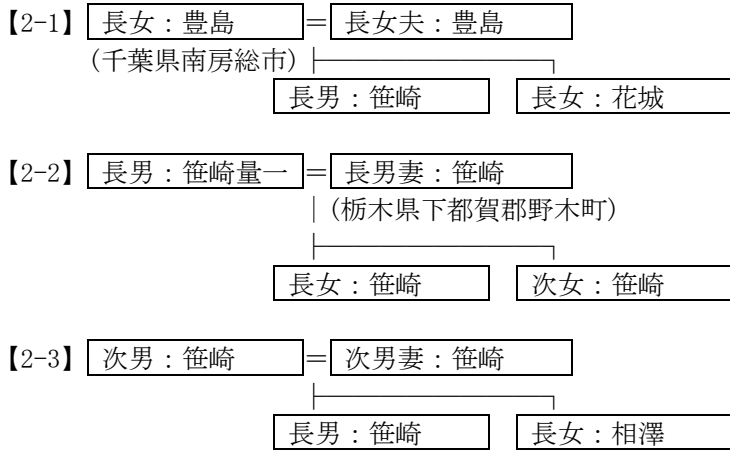
次男：笹崎

(長野県茅野市)

【2-3】

三男：笹崎

(千葉県館山市)



むらまつ すすむ

●村松 進：秘書（機関士）



●データ

村松 進 26歳
香川県
生年月日不明
昭和2年6月14日没

■紹介

甲斐源氏の流れを汲む代々医家を営む村松家の村松覺雄・なかの三男として生まれた。進の兄学佑は帝国医科大学を卒業し、山梨県病院長を務める。

県立甲府中学校を卒業後、明治39年海軍を志願し横須賀海兵団に入り、明治43年白瀬島の南極探検の隊員が募集されると血気はやる進は南極探検隊員に志願した。当初は機関士として採用されたが二次隊からは秘書となった。

南極に到達した白瀬隊はホエール湾に根拠地を設営したが、村松進は北海道出身の吉野義忠隊員と突進隊が帰還するまで、根

拠地で気象観測に当たった。

探検隊員の選抜は東京帝国大学内科医室で医学博士3人による身体検査と面接が行われたが、その3人の医師の中に「村松」の名前があり、進の兄学佑とみていい。

探検後は南洋興業株式会社に入り、マーシャル諸島ジャルート島支店の主任となる。辞した後、東京で実業に従事していたが、大正15年病に罹り昭和2年6月14日東京で死去した。

進は、出航に際しその心境を漢詩に託して血判を押し、遺品として姉に預けた。

「開南丸に搭して、
将に南極探検の途に
上がらんと此を賦す。
願わず此行身命の全きを。
赤心唯誓う諸賢に報いん。
悠々たる極地知る何れかの処か。
笑て上る南暎万里の船。」

峽雲 村松 進（血判）

村松進が持ち帰ったペンギン（皇帝ペンギン）の剥製は進の姉が嫁いだ深沢純（あつし）宅で収蔵。

帰還後南洋貿易に志、南陽興業 K.K. に入社。マーシャル群島ヤルート島の支店長を勤め多年海外で活躍する。

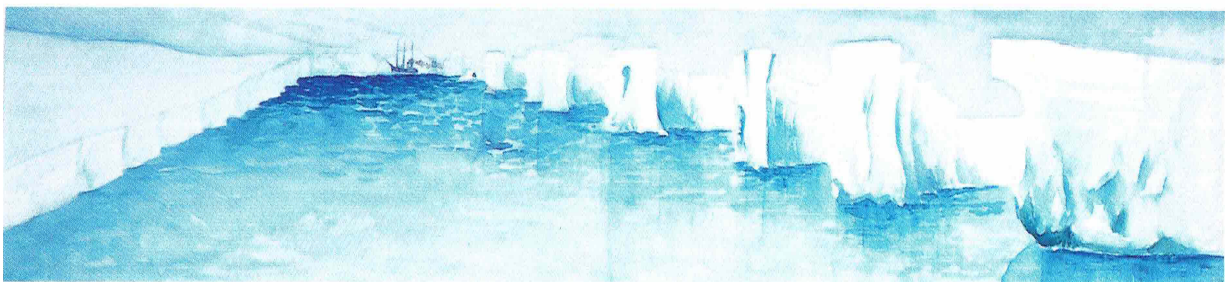
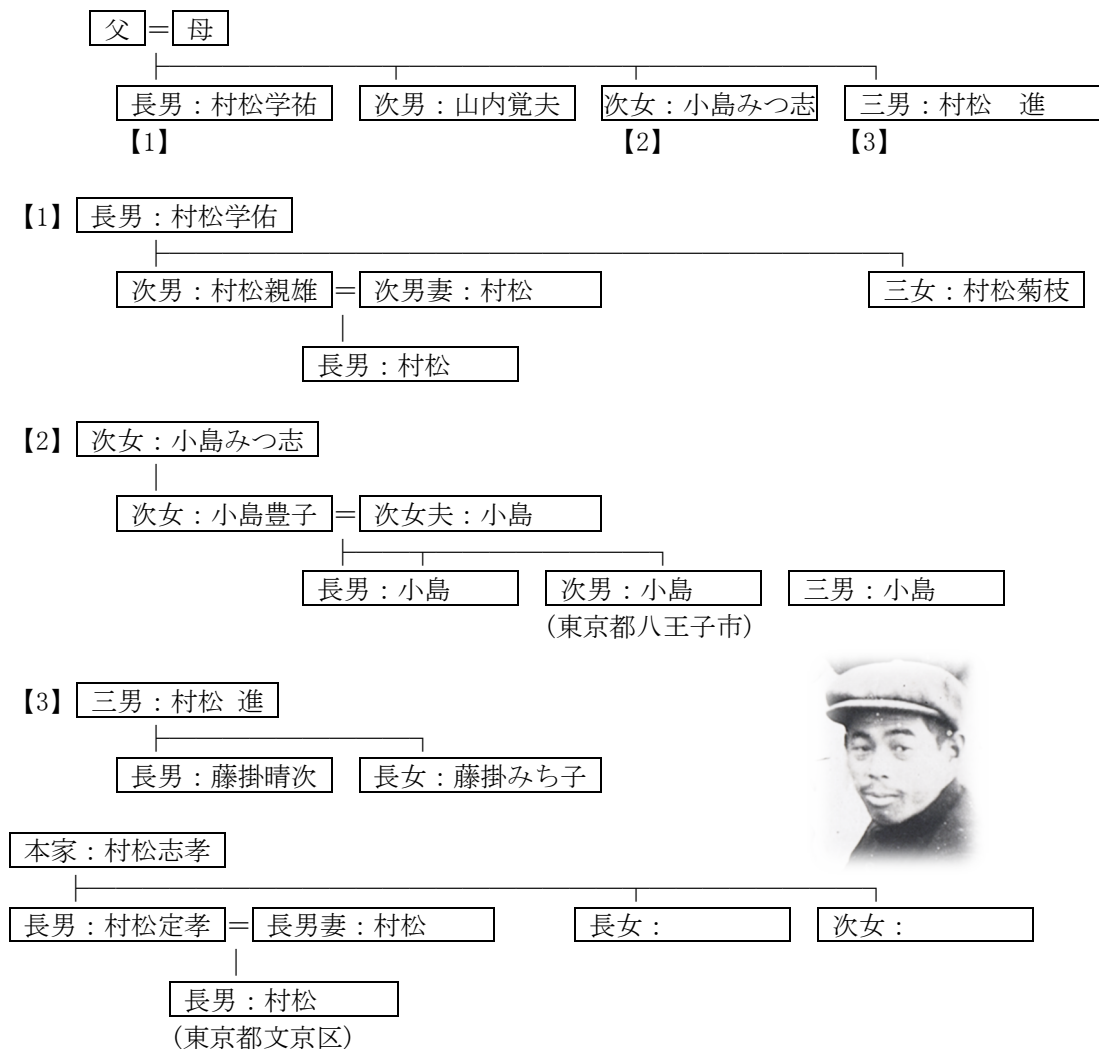
■参考文献

市川地区文化教会「蛾眉」 2019 第48号

「市川大門町誌」 昭和42年2月1日 発行

「雪原に挑む白瀬中尉」 渡部誠一郎著

平成3年4月23日 増補改訂第3刷秋田魁新報



氷壁と開南丸 (8.8×50.5cm) 上陸地点を捜す「開南丸」

● たかがわ さいじろう
高川 歳次郎：水夫長



● データ

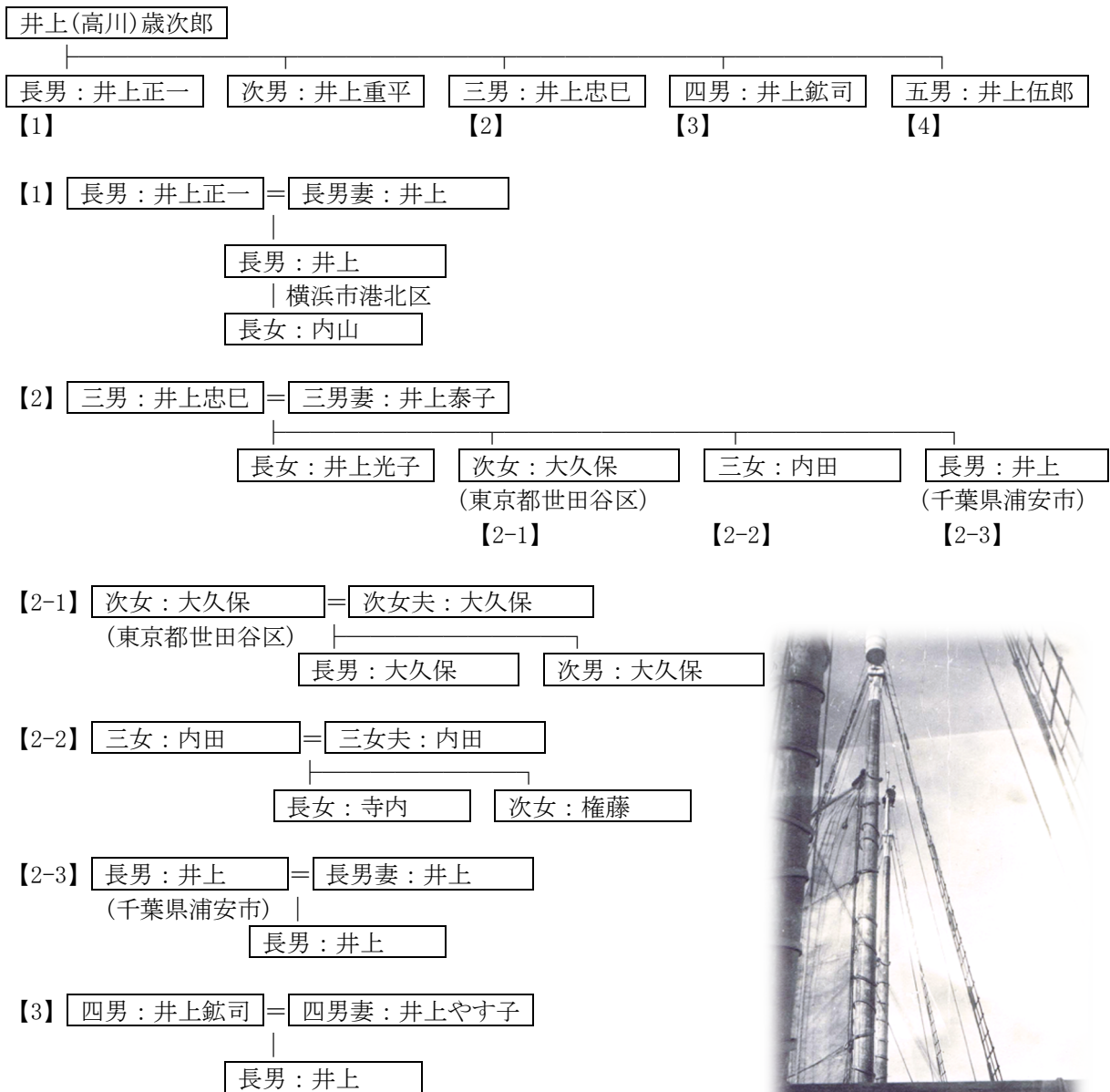
高川 才次郎 31歳
三重県
明治14年2月15日生
昭和12年9月5日没

■ 紹介

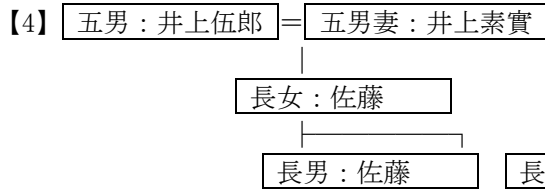
マストに取り付けた樽の見張り台で、昼夜を問わず航行の安全に務めた。

南極からの航行時には、ペンギンの剥製に取り掛かった。

釣りを得意とし、航海中鮪を釣りあげる。帰国後に井上家に養子となる。



南極に立った挑戦者たち



さとう いちまつ

●佐藤 市松：舵取①



●データ

佐藤 市松 33歳
福島県
生年月日不明
昭和34年3月19日没

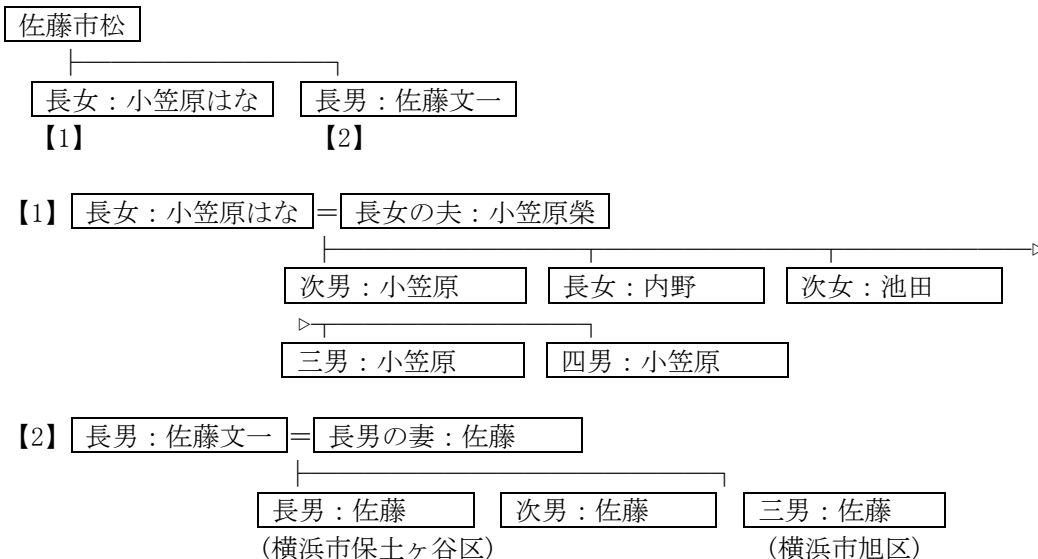
■紹介

日露戦争時、海軍三等兵曹として活躍。軍艦「八重山」に乗艦し北海道根室湾で沈没した経験もある。船長の野村直吉と知り合いで南極探検隊に参加した。南極では氷が一面に張りつめ船が氷圧できしみ、もうダメだと何回も思ったと供述している。

探検後は船員生活50年余りを続け、昭和34年3月19日、81歳で生涯を閉じた。

■参考文献

朝日グラフ新年特大号1956



わたなべ おにたろう

●渡辺 鬼太郎：舵取



●データ

渡辺 鬼太郎 29歳

愛媛県

明治16年6月25日生

昭和没年不明

■紹介

お国自慢の伊予節が得意。滑稽で皆を笑わせた。マレーシアに移民したらしいが、詳細は不明である。

情報探索しています。ご協力いただければ幸いです。
(NPO事務局)

かまだ ぎさく

●釜田 儀作：舵取



●データ

釜田 儀作 27歳

石川県

生年月日不明

没年不明

■紹介

情報探索しています。ご協力いただければ幸いです。
(NPO事務局)

すぎさき ろくごろう

●杉崎 六五郎：火夫



●データ

杉崎 六五郎 36歳

神奈川県

生年月日不明

昭和4年没

■紹介

36歳で探検隊に参加。探検後は漁船や紡績会社で働き、昭和4年に死去した。

■参考文献

みちのくサンスポ

杉崎六五郎

長男：杉崎杉松 = 長男妻：杉崎

長女：山田 = 長女夫：山田
(名古屋市天白区)



たかとり すみまつ

●高取 寿美松：火夫①



●データ

高取 寿美松 35歳
東京都
生年月日不明
没年不明

■紹介

心臓の持病があつて1次で帰国している。
情報探索しています。ご協力いただければ幸いです。
(NPO 事務局)

わたなべ ちかさぶろう

●渡辺 近三郎：賄長



●データ

渡辺 近三郎 29歳
岐阜県
生年月日不明
昭和37年2月12日没

■紹介

日米航路の「日本丸」の船員であつた渡辺近三郎は、白瀬南極探検隊に応募し食糧担当として隊員に加わった。南極探検では、

渡辺は、西川源蔵とともに、ロス海ホエール湾で白瀬隊長の5人の突進隊と別れて東航した開南丸の沿岸探検隊としてエドワード七世州を望むビスコー湾から内陸16キロまで入り、アレキサンドラ山脈の山すそに「大日本南極探検隊沿岸隊上陸記念標」(木製)を建てるとともに一帯を写真撮影した。

賄長としての記事が「婦人世界・第七巻第13号(大正元年11月1日)氷塊で飯を炊く一南極探検の料理日記一」に詳細に掲載されている。「明治45年の正月元旦に船上で餅をつき雑煮をつくったところ、高波で鍋をひっくり返してしまいました。アザラシやペンギンを捕らえて食糧にしました。アザラシの肉は3回も水にして血抜きしてから味噌煮と照焼にして食べ、油は燃料に使いました。南極で食べたものは一度もおいしいと思いませんでした。日本に帰って何よりもおいしかったのは菜っ葉の香の物と野菜物でありました。殊に小笠原島で久しぶりに茄子の糠味噌漬けを食べた時は何ともいわれませんでした……………」

探検後は満州にわたりコック生活を続け、昭和37年2月12日埼玉県浦和市で肝臓

ガンのため死去した。

■参考文献

「雪原に挑む白瀬中尉」 渡部誠一郎著
平成3年4月23日 増補改訂第3刷
秋田魁新報社
婦人世界・第七巻第13号
(大正元年11月1日)



渡辺近三郎

渡辺近三郎のきょうだい

長男：鳥居新太郎

しばた かねじろう

●柴田 兼治郎：水夫



●データ

柴田 兼治郎 20歳
愛知県
生年月日不明
昭和13年4月26日没

■紹介

学歴・経歴等：南極記によると、郡司大尉の部下としてカムチャッカ、千島で活躍した経歴を持つとある。

隊の役職は水夫。第二次探検隊では嵐の中、傾斜 35 度以上に揺れる開南丸のマストの

頂上に上り、トップマストの縛着作業に従事した記録や、花守隊員が射撃した大海豹の捕獲を試み、凍てつく南氷洋に裸で飛び込むなど、隊員・船員の中でも勇敢気鋭で鳴らしたと同記には5頁にわたって紹介されている。嵐の中大揺れに揺れるマストへ登って仕事をするのはいつも柴田水夫だった。

南極上陸後は、南極点を目指す白瀬隊長率いる5名の突進隊、エドワード7世州に上陸し沿岸の学術調査に当たった池田政吉率いる5名の沿岸隊、2名の根拠地観測隊にそれぞれ分かれて活動したが、野村船長が操る開南丸は、くじら湾を出て東に航行し地形調査を行っている。水夫である柴田は当然開南丸に乗船してこの調査に加わっており、成果としては、当時としては南極で最も東の西経151°20分に到達するとともに、くじら湾に戻る途中の湾を「大隈湾」と命名、「大和雪原」、「開南湾」とともに後にアメリカ地学協会の公認の地名となっている。

柴田は探検後、米国に密航し、帰国後鋼管会社で通訳をして昭和13年結核により没。

■参考文献

「南極記」 南極探検後援会長 大隈重信
産経新聞、産直ニュース、みちのくサンスポ

柴田兼治郎

父 = 母

長女：柴田小萩 長男：柴田兼治郎 次男：柴田嘉一 次女：柴田みさを

【1】

【2】

三男：柴田嘉重 四男：柴田 貢 五男：柴田作次

【3】

【4】

【1】 長男：柴田兼治郎 = 長男妻：柴田ハツ

長女：柴田正子



【2】 次男：柴田嘉一 = 次男妻：柴田

長女：伊東 次女：砂田 長男：柴田 次男：柴田

【2-1】

【2-2】

【2-1】 次女：砂田 = 次女夫：砂田

長女：砂田 次女：砂田

【2-2】 長男：柴田 = 長男妻：柴田
(神奈川県大和市)

長女：柴田 次女：赤寄
(神奈川県大和市)

【2-3】 次男：柴田 = 次男妻：柴田

長男：柴田 長女：柴田 次男：柴田

【3】 三男：柴田嘉重 = 三男妻：柴田一江

長男：柴田 次男：柴田 長女：柴田 三男：柴田

【3-1】

【3-2】 長男：柴田 = 長男妻：柴田

長男：柴田 次男：柴田

【4】 四男：柴田 貢 = 四男妻：柴田千鶴子

長男：柴田 = 長男妻：柴田 長女：土井

長男：柴田 長女：柴田

ふくしま きちじ

●福島 吉治：水夫



●データ

福島 吉治 19歳
千葉県
生年月日不明
昭和18年3月2日没

■紹介

隊員・船員の中で最年少参加。エドワード7世州の探険において、西川・渡邊両隊員が一時行方不明と判断され捜索隊を出す騒ぎとなったが、両名が自力で戻る途中、濱崎船員とともに迎えに出て食料(餛飩)を与え元気づけている。



みやけ ゆきひこ

●三宅 幸彦：見習運転士（通訳）②



●データ

三宅 幸彦 27歳
和歌山県和歌山市
明治17年5月22日生
昭和40年10月25日没

■紹介

三宅幸彦は、京都で生まれ材木商の長男として和歌山で育った。中学3年の時、父親と意見が合わず祖父に連れられてアメリカへ渡った。ロサンゼルスของハイスクール、アイオワのカレッジで学んだ後、ノルウェー帆船のにわか水夫となってアルゼンチンに渡る。その後隣国ウルグアイから英国船で欧州へ行った。その後、明治41年ニュージーランドの汽船会社で働く。

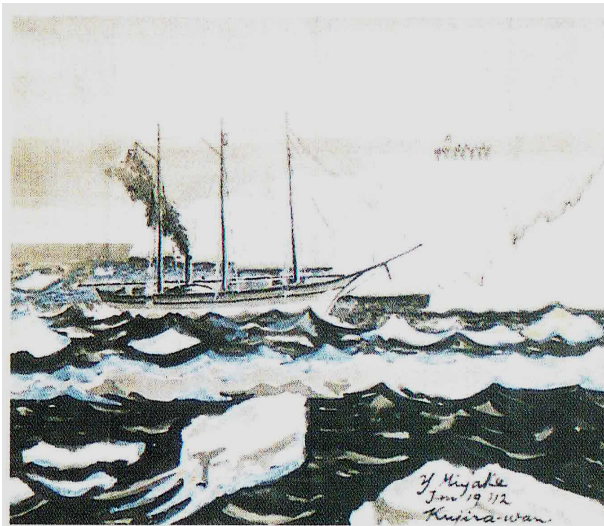
明治44年2月8日白瀬探検隊の開南丸がウェリントンに寄港したので、オークランドにいた三宅は喜びの余り、なつかしき祖国からきた開南丸に「南極を枕に大和心を成し遂げよ」と祝電を打った。開南丸は南極に向かい、三宅は同年3月にシドニーに渡った。南極の地に上陸できず空しくシドニーに引き上げた白瀬隊に会いにいき「前に祝電を打った者です」と隊長に面会、語学力を買われ通訳として採用された。「こんな小さな船に、通訳とは大げさだから、名目は運転士見習ということにしてくれ」と隊長から言われた。

第2次探検隊に加わった三宅は、開南丸が鯨湾に入った時誰かが「海賊船だ」と叫んだので、よく見るとノルウェーの国旗を掲げアムンセン隊の迎えに来た船フラム号だった。幸い三宅はかつてノルウェー船に乗ったことがあるのでわかった。野村船長と三宅は隊長の命を帯び、通訳として船長ニールセン以下11名を訪問。後から開南丸を訪問した士官2名は「こんな船では我々はとうていここまでどころか、途中までも来ることはできぬ」と驚いていた。

三宅は留学中、街頭で絵を描いて学費を稼いだほどの腕前で、南極探検時には「荒れる海」「氷海」「南極の生物」など片っ端からスケッチし、帰国後、それを畳半分ほどの美濃紙にまとめた。初めは油絵だったらしいが、中川八郎画伯の忠告もあって墨絵に変えたという。長男数彦氏の依頼で白瀬研究家の湯川氏を経て現在は白瀬南極探検隊記念館に保存されている。

なお、長男の数彦氏手記には、探検後は隊長はじめ隊員は、探検に費やした借財で長い間赤貧の状態だったそうで、無け無しのお金を融通しあったり、健康を気遣いあったりして生活苦を乗り切ったようだが、父も折りあるごとに励まされ、助けられていた中、モネやゴッホなど画家の絵を模写したり、海図を広げて母と楽しそうに語らうなど生活苦を感じさせない人生を歩んだように見受けられる、と表している。

三宅は家族に「日本人としての誇りを持って」「正直に生きろ」「人が困っていたら自分を捨ててでもできる限りのことを尽くせ」「物事に対処するには世界的視野で自分で考える」「いつお召しがあっても対応できるよう日頃から学んでおけ」と言っていたそうである。



(20.5×26.5cm)

明治45年1月16日 7人を上陸させ沿岸調査に出る「開南

三宅本人が記した履歴書を次に示す。

三宅幸彦の履歴書より(昭和27(1952)年9月 74 歳)

原籍：「和歌山県和歌山市手平 1 3 2 番地」

現住所：「千葉県印旛郡千代田町四街道 1 5 8」

生年月日：「明治 1 7 (1884) 年 5 月 2 2 日」

学業

明治 3 0 年 5 月～明治 3 3 年 7 月

和歌山県立中学校入学第 3 年級修了後
渡米

明治 3 3 年 9 月～明治 3 6 年 2 月

北米加州ロサンゼルス市市立ハイスク
ール入学。第 2 年級修了

明治 3 6 年 4 月～明治 4 0 年 5 月

北米アイオワ州デモイン市私立デモイ
ンカレッジ入学。在学 4 年後南米渡航

業務

明治 4 0 年 1 0 月～明治 4 1 年 4 月

アルゼンチン國英亜大西鉄道会社庶務
課書記補助員として勤務。渡英

明治 4 1 年 9 月～明治 4 4 年 3 月

ニュージーランド國ニュージーランド
汽船会社庶務課書記補助員として在勤

明治 4 4 年 4 月～明治 4 4 年 1 1 月

豪州シドニー市、小村貿易商会にて注文

取及倉庫係として勤務

明治 4 4 年 1 1 月～明治 4 5 年 6 月

白瀬南極探検隊(第二次)に参加、極地を
経て帰朝

大正元年 1 0 月～大正 1 2 年 8 月

大阪市、東印度貿易株式会社経営。ジャ
バ園バタビヤ(インドネシアのジャカル
タ)支店長として在勤

大正 1 2 年 1 0 月～昭和 6 年 1 1 月

ブラジル國、クリスタ・フリヤノーバ・
ボヘミヤ硝子工場にて意匠係主任とし
て在勤

昭和 7 年 1 月～昭和 1 7 年 4 月

大阪市にて合資会社三宅商店を経営、床
板製造販売業に従事

昭和 1 7 年 5 月～昭和 1 9 年 4 月

東京都にて外語私塾(英・馬・西語)を
経営

昭和 1 9 年 5 月～昭和 2 0 年 1 月

東京都、山之内製薬株式会社輸出部在勤

昭和 2 0 年 1 月～昭和 2 7 年 4 月

米軍 8 0 1 0 部隊鉄道輸送司令部職員
として勤務。千葉 R・T・O 主任(後半期)
として在勤

昭和 2 7 年 4 月～

講和成立に伴い千葉 R・T・O は閉鎖され自
然解雇となる。依頼自宅にて水産動物図
鑑の作成に従事

参考文献

「雪原に挑む白瀬中尉」渡部誠一郎著

(秋田魁新報社)

「世界文化地理体系 月報24」

「履歴書」(昭和27年9月現在)

三宅数彦氏よりの資料

「死亡診断書」小櫃病院：医師倉持邦雄

(昭和40年11月2日付)

関連資料

三宅幸彦の履歴書(昭和27(1952)年9月 74 歳)

三宅幸彦スケッチ

三宅幸彦

長女：三宅昌子

長男：三宅数彦

次男：三宅保彦

【1】

【1】 長男：三宅数彦 = 長男妻：三宅
(東京都練馬区)

長男：三宅

長女：三宅

次女：三宅



はまさき みおさく

●浜崎 三男作：火夫②



●データ

浜崎 三男作 27歳
大分県
生年月日不明
没年不明

■紹介

情報探索しています。ご協力いただければ幸いです。
(NPO 事務局)

■昭和の白瀬南極探検隊

NP0 法人 白瀬南極探検100周年記念会
調査専門部会員 石船 清隆
にかほ市教育委員会白瀬南極探検隊記念館副主幹(学芸員)

はじめに

明治45年(1912)1月28日、白瀬矗率いる南極探検隊・突進隊5名は、南緯80度05分、西経156度37分まで到達し、日章旗を立て、銅箱に納めた寄附者名簿をその下に埋め、一体を「大和雪原(やまとゆきはら)」と命名しました。

明治期に行われた南極探検の後、大正期には飛行機による南北両極探検の計画がありましたが、実行されることはありませんでした。

昭和期には白瀬自身が南極で領土宣言した一帯を日本の領土となるよう、いろいろな方々に働きかけていることがわかりました。

これまであまり知られてこなかった、イギリスやアメリカ、そして日本の外務省に対し、白瀬矗が亡くなる直前まで南極の領土を主張した結果、戦後日本の食糧難を救った南氷洋の捕鯨に繋がるという、数奇な歴史を紹介します。

1. バードと「日章旗」

昭和30年3月、朝日新聞社の矢田喜美雄記者が13回にわたって連載した「北極と南極」という記事は、日本の南極観測に火をつけた記事として有名です。

飛行機による北極点と南極点をめざして探検したアメリカのリチャード・E. バードについて書いた10回目の記事の中に、次の記述があります。

「昭和4(1929)年の暮れ、極に向かって飛んでいると…突然、彼の目は氷原の一角にクギづけされた。まっ白い世界に赤い一点。彼は機長に命じてその赤いもののまわりを旋回し、三回目にやっと正体をつかんだ。それは、細いタケザオの先に結ばれて風にはためく『日の丸』旗であった。」(「北極と南極⑩」朝日新聞 昭和30年(1955)3月25日付)

南極探検30周年記念だった昭和16年(1941)5月には南方展覧会が東京三越日本橋本店で開催され、5月13日から15日まで講演会も行われました。15日には白瀬矗も「日本南極探検の感想」という題名で講演をしており、同年6月20日に発行された『文明協会ニューズ日本と世界第176輯』に講演録が載っています。

「昨年か一昨年アメリカのバード少将が、第1回の時は見なかったそうですが第2回探検の時に飛行機の上から下を見ると旗が立っているのを見た、その旗というのが吾々が立てて来た日章旗である。そこでバード少将は我が外務省に『八十度の所に日本の国旗があるが日本は彼處を探検したことがあるのか』と問い合わせてきた」と講演で述べています。(白瀬矗 1941)

明治45年(1912)年1月28日、白瀬矗を南極探検隊長とした白瀬南極探検隊の突進隊5名が、この地に「日章旗」を立ててから17年後、バード少将が本当に日本の探検隊の残した日章旗を発見したのでしょうか。

朝日新聞の記事や白瀬矗の講演について、バードが日章旗を発見したかどうか真偽は定かではなく、バードの報告書に記載があるかどうか、関係する記録などは、今のところ見つかつ

南極に立った挑戦者たち

てはいません。

昭和4年(1929)4月6日付朝日新聞に「バ中佐の南極探検で英米に外交問題」の記事が掲載されました。記事を見た白瀬轟は白瀬隊が探検した地点の領土の主張を亡くなる直前までしています。

南極の地名や領土権について、アメリカやイギリス、そして日本の外務省、帝国議会にも積極的に働きかけていたことが、白瀬記念館を含めた関係機関に残された資料でわかりました。

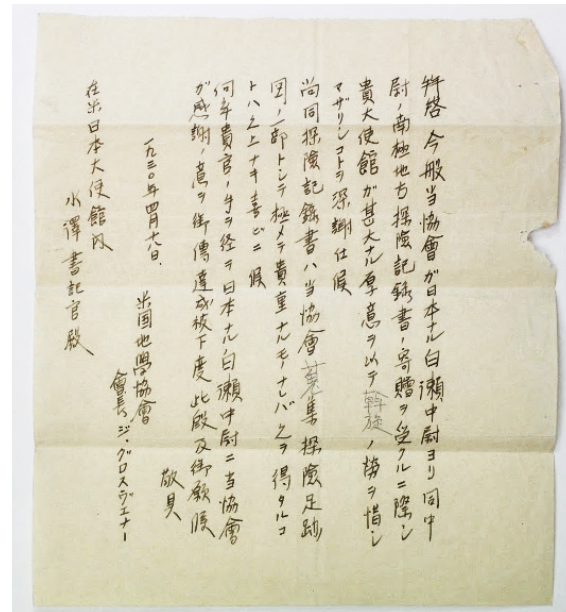
今回は、残された昭和期の資料をもとに南極の領土権について、何度も交渉する活動を紹介していきます。



南極観測の火付け役となった矢田喜美雄氏の13回にわたる「北極と南極」10回目の記事

飛行機で南極探検をしていたバード少将が「日の丸」の旗を発見した。

朝日新聞 昭和30年(1955)3月25日付



白瀬轟から米国地学協会宛に「南極探検記録書」が寄贈されたことの礼状

白瀬轟の四男・勇が解読したと考えられる。
浄蓮寺資料 1930年4月18日 在米日本大使館内 水澤書記官宛米国地学協会会長ジ・グロスヴェナー書簡

2. イギリスに関する渉外の記録

白瀬南極探検隊記念館に浄蓮寺から寄贈・寄託された資料の中に、在日イギリス大使館からの書簡などが残っています。

資料の年代は昭和4年10月4日から昭和7年4月11日までのもので、白瀬轟が在日イギリス大使館などに手紙を送り、返信された書簡によって明らかとなったことを紹介します。

昭和4年10月7日白瀬轟宛在日イギリス大使館書記官からの書簡によると、同大使館の今田俊生に白瀬が送った日本語の手紙を英訳してもらったと記され、内容を理解した上で「英文で記述されている日本の南極探検記録を調べたが、貴下が鯨湾以南に進んだ事は英文で発表されていない。」と記しています。さらに「領土権承認を請求するに先立ち、英文で探検記を発表することが必要」とも記されています。日本文の資料を送付すれば喜んで英訳するという記

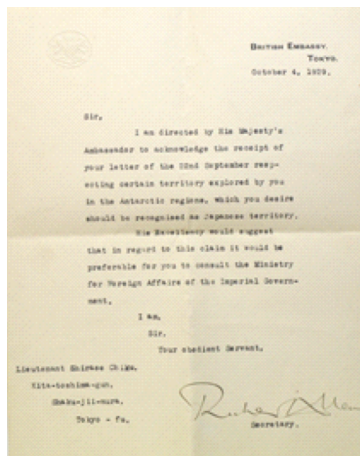
述も返信の中にはありましたが、実際には大使館の業務に忙殺され、英訳はできなかったようでした。

昭和5年1月26日付イギリス外務省宛白瀬直筆の手紙では、「南極地方領土権獲得の件に付照会」と題し、白瀬隊は日本帝国の民間派遣隊で、日本の領土として南極を占領、その地域を日本帝国政府に寄付することとしています。

日本の主張する南極領土の緯度経度はイギリスの南極領土とは遠距離であると主張します。そのほかシャクルトン隊で同行したシドニー大学ディビット教授やモーソン博士と白瀬隊は当時会見し、一緒に写真撮影をしていることや、明治45年に日本南極探検後援会長・大隈重信の名前で英国探検協会に地名をつけて報告したと記しています。

イギリス外務省にこの手紙が届き、白瀬の手紙を受理し、イギリスで対応があったのかどうかは、今のところ不明です。

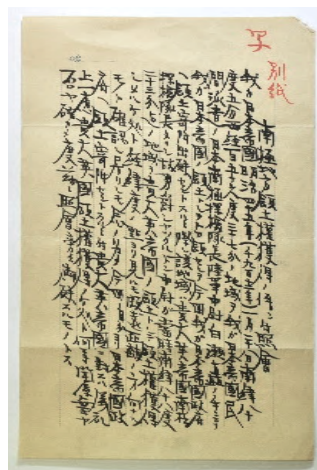
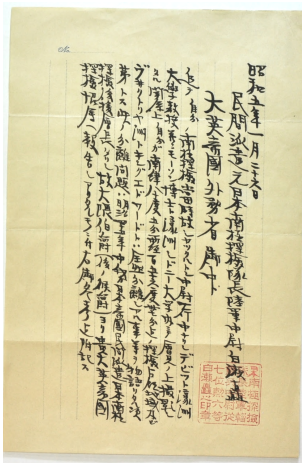
ちなみに白瀬隊は明治45年8月18日、日本に帰国してすぐ、イギリスロイヤル地理学会に日本南極探検の成果を報告しています。報告したのは、学部部員の池田政吉隊員であることが、イギリスに残された資料からわかっています。



昭和4年（1929）9月22日付で在日イギリス大使館に白瀬直筆の手紙を出し、10月4日付で在日イギリス大使の回答を書記官（秘書）が書いた手紙である。

白瀬が南極の探検した場所を日本の領土であると主張した9月22日付の手紙について、受理するよう大使は書記官に指示しており、イギリス外務省に直接相談したほうがよいと提案されているという。

浄蓮寺資料 1929年（昭和4）10月4日付白瀬直筆在日英国大使館書簡



イギリス外務省宛に提出したはずの白瀬直筆の手紙。

この手紙を東京中央郵便局で英訳したため、日本語の手紙は結果的に白瀬の手元に残ったと考えられる。

浄蓮寺資料昭和5年1月26日付大英帝国外務省宛白瀬直筆書簡「別紙 南極地方領土権獲得の件に付照会」

3. 杉村楚人冠とアメリカからの照会

イギリスの南極探検は、明治43年の白瀬隊が出発する直前まで、日本に書籍や新聞で紹介されました。

とくに新聞記者の杉村楚人冠（そじんかん・本名：廣太郎）を中心とする朝日新聞では、北

南極に立った挑戦者たち

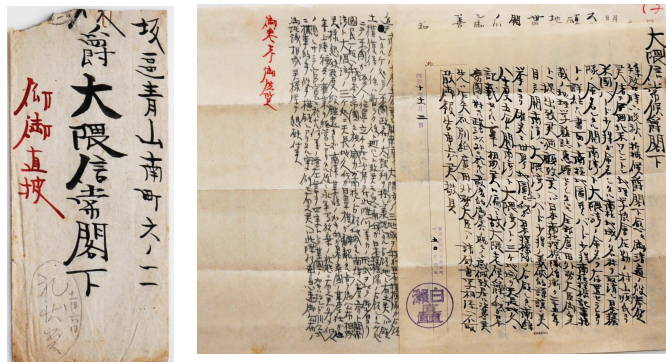
極や南極の記事を海外から配信された記事で紹介しました。

明治42年7月3日から「南極探検」（3回連載）、同43年4月9日に「南極探検家」、同年6月14日に「南極探検出発スコット大佐再挙、最新式の探検隊」などの記事に関わります。杉村は大隈重信を会長とする南極探検後援会の幹事も務めた人物でした。（小林康達 2012/我孫子市杉村楚人冠記念館編 2012）

昭和4年11月14日に朝日新聞杉村楚人冠宛白瀬矗の手紙が我孫子市杉村楚人冠記念館に残されています。内容は、日本帝国の民間派遣の南極探検隊が領土権獲得を公布し、議会へ請願、探検後移民または軍隊駐屯が必要ではないかなど、南極の探検した地点を日本の領土となるよう研究していることを楚人冠に報告しています。イギリス・アメリカ両国が南極の領土権を主張する中、日本も主張するのに国際公法上差し支えないか、楚人冠にも知見を伺っています。

石田榮雄の論文では、昭和5年1月27日幣原外務大臣宛出淵勝次在アメリカ日本大使の文書が引用され、「米国の地学協会以南極地方の地図を出版するので、資料を出せと言ってきたから、昭和4年7月26日附貴信欧二普通公第847号（欧米局第二課）添付の同大尉願書中記載ある白瀬一行到着地点を示しておいたが、同協会は右地点のほか、一行のとった経路を知りたいと言って来た故、速やかに資料を出せ」（石田榮雄 1957）と言ってきていたとい

います。
我孫子市杉村楚人冠記念館所蔵資料の昭和5年3月11日付杉村廣太郎宛白瀬矗書簡の中に、同年3月9日付白瀬矗宛野口権蔵書簡が同封されていました。



大隈重信の養子・大隈信常侯爵に宛てた白瀬矗の手紙を秘書の戸田傳四郎が長年保管していた手紙。

アメリカ地理学協会に勤めていた日本人・村山順から届いた手紙と図面が白瀬矗に届いたが、廣田外務大臣にすべて提出してしまい、大隈を通じて外務省に返却を求めたという内容。

大和雪原で領土宣言後、昭和6年5月23日付で領土寄附願を幣原外務大臣に提出したことがわかる。

白瀬は南極の占領地域と開南湾、大隈湾の領土問題を長年放置している日本に対し、領土の主張をするよう、過去の資料の写しを添付して、大隈信常に訴えている。

白瀬記念館寄贈資料昭和10年11月2日大隈信常宛白瀬矗書簡

その書簡によると、アメリカ国務省の申し出で『南極記』が必要だという報知新聞の記事を見た川越在住の野口権蔵が所有している『南極記』を白瀬矗に差し上げたいと手紙を出し、野口権蔵から譲り受けた『南極記』を外務省を経てアメリカ国務省に郵送することになったことから、杉村楚人冠が所有していた『南極記』は確実に保有してほしいと白瀬が手紙でお願いしている内容になっています。（昭和5年3月11日付杉村廣太郎宛白瀬矗書簡 我孫子市杉村楚人冠記念館所蔵資料）

1930年（昭和5）4月18日付在アメリカ日本大使館書記官宛アメリカ地理学協会会長ジ・グロスヴェナーからの手紙が浄蓮寺の資料に残されていました。白瀬中尉から「南極探検記録書」の寄贈にあたり、在アメリカ日本大使館が多大な貢献をしていただいたことに深謝し、併せて白瀬中尉に当協会が感謝の意を伝達してほしいと日本語で書かれた手紙が残されています。このことから、野口権蔵の『南極記』が白瀬と外務省を仲介して、アメリカ地理学協会およびバード少将の手元に届いたものと考えられます。



「南極探検記録書」と考えられる
大正2年発行の『南極記』
白瀬南極探検隊記念館所蔵資料

4. アメリカ地理学協会・村山順

アメリカの地理学協会には、白瀬と協力した一人の日本人がいたことが、残された資料からわかっています。村山順（はじめ・明治12年（1879）生、昭和29年（1954）没）は、京都高等工芸学校図案科一期生で、大正10年（1921）から昭和16年（1941）まで、アメリカのナショナル・ジオグラフィック社に所属し、動物図を制作していたといいます。その作例はジオグラフィック社が刊行しているシリーズNational Geographic Society THE BOOK OF DOGS 1927、THE BOOK OF FISHES 1961などに残されています。（石井香絵 2018）

村山は洋画家・牧野克次の長女・直と明治43年（1910）に結婚し、没年までアメリカで暮らしていました。（石井 同）

昭和10年10月12日付白瀬宛村山順の直筆の手紙が、白瀬、谷口善也とともに日本極地研究会を作った木村義昌の資料に残されています。

バード少将の南極探検の記事が掲載されたアメリカ地理学雑誌10月号と1932年発行の南極地図を白瀬に送ったが、雑誌の南極の地図には赤鉛筆で「開南湾」「大隈湾」を記入し、同封した南極地図には、開南湾を「ヘレンワシントンベ」、大隈湾を「ハルフラットベ」と掲載しているが、『南極記』で日本人探検家が1912年に発見し命名していたため、バード少将が最初の探検で名付けた所を後に改正した。過去においてバード少将ほど南極を研究している探検家はいないので、一言一句地理学会に影響を与える人物である。白瀬の名とともに大隈湾・開南湾の名称が永遠に世界の地図に輝く事を、同じ日本人として欣喜に堪えない。躊躇なく自分の命名したものを取消、白瀬の命名したものを採用したバード少将も人格者として敬意を表す。と書かれています。

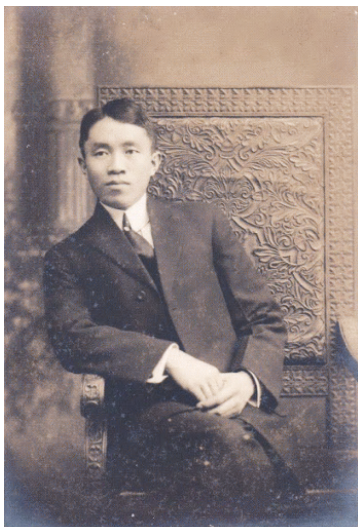
ほかに、136年（昭和11）4月8日付白瀬宛村山順の手紙（白瀬による写し）では次のように書かれています。

大隈湾・開南湾に改名以来、東京朝日、報知、ジャパニアドヴァタイザー等を拝見している。バード少将秘書官サンダース海軍中佐が役所（アメリカ国務省地理学協会）に来社され、『南極記』の大和雪原に関する部分の英訳を（村山に）依頼され、早速翻訳した。後援者芳名録を入れた銅製の箱、日章旗、天皇陛下万歳三唱を広漠な雪原で行ったが、いずれ大日本帝国の領土として人馬往来もあるかもしれぬと特に力を込めて訳述した。

南極に立った挑戦者たち

このことから、村山順が『南極記』の英訳をしたため、バード少将やアメリカ地理学協会の南極の地図などを編集する関係者に日本の南極探検が理解されることになったとわかります。

昭和11年10月5日付木村義昌宛白瀬矗の手紙には、村山順の手紙（白瀬の写し）とバード少将の側近だったハロルド・E・サンダース中佐の手紙（白瀬矗の写し）も残されており、白瀬隊が命名した南極の地名がアメリカが製作する南極の地図に反映されたのは、村山順の存在が大きく影響したといえます。



村山順の写真

竹田美寿恵・勝成忠ブログ 平成29年11月
「画家 牧野克次の家族と人生」
<http://katsu85.sakura.ne.jp/hanako.htm>



米国地理学協会の村山順が白瀬矗に宛てた手紙

バード少将が命名した南極の地名を、白瀬矗が命名した「大隈湾」「開南湾」に改正したということを報告しています。

木村義昌資料昭和10年10月12日 白瀬矗宛村山順書簡

5. 日本国内での対応

日本の外務省や帝国議会に対する白瀬の南極探検について、時代ごとで整理すると、明治期は帝国議会に南極探検の補助金下付を働きかけました。同郷の斎藤宇一郎なども関わっていましたが、結局交付されず、国民からの義援金で実行されました。南極探検の成果は記録映画や講演、展覧会を行うことで、寄付者に還元しています。

大正期は飛行機や船舶を使用した南北両極探検を実行しようと、帝国議会に約20万円の補助金下付を請願しています。紹介議員は同郷となる秋田出身で文部大臣にもなった田中隆三でした。

バード少将が北極だけでなく南極も飛行機によって探検したことで、昭和4年4月4日朝日新聞記事「バ中佐の南極探検で英米に外交問題」として取り上げられ、白瀬矗はバードの記事をきっかけにして、自身が探検した南極地域を日本に寄付し、領土権を主張するよう外務省や帝国議会、そして国民に生涯をかけて働きかけていくことになります。

昭和14年7月9日東京・芝区青年団会館で行われた南極探検28周年記念大会では、極洋捕鯨株式会社取締役で海軍大佐の中村虎猪（とらい）が「南極洋の捕鯨事業」と題して講演しています。

講演の中で、白瀬が占領を宣言している南極付近や開南丸の航路を示し、南緯55度から66度付近の五千マイル位の海面に世界の捕鯨船が集まり、自社も世界の漁業国と争っていると述べています。

中村の会社では鯨を捕る船が9艘、大きい船が1艘で捕鯨船隊の1団隊を形成しており、日本には6団隊、ノルウェーは10団隊、イギリス9団隊、ドイツ7団隊、アメリカに1団隊あったといひます。

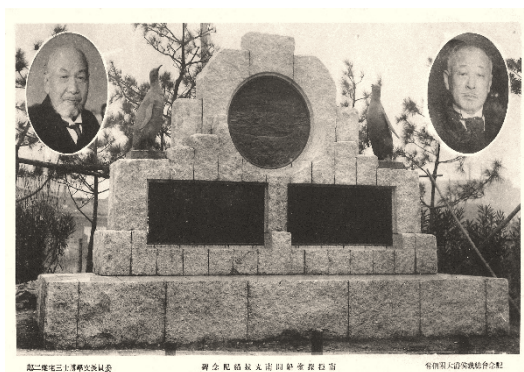
南氷洋に占領地があれば、そこに工場を作つて、鯨を処理することができますが、どの国も南氷洋に占領地はないため、3万トン以上の船を造り、鯨の油を船の工場で精製しました。鯨油は日本に持ち込むと日本の製油業者がひつ迫するため、国内ではなくイギリス、オランダ、ドイツに販売して外貨を稼ぎました。その外貨は支那事変や軍需品に使うためだったといひます。

このように南極探検後の記念事業での白瀬臺の講演録などを見ると、日本の沿岸捕鯨の限界から、南氷洋での遠洋捕鯨を始めるため、南極や千島の探検に係わつた白瀬臺の過去の実績を根拠に、北洋や南氷洋で遠洋捕鯨事業を推進する団体と結びついていったことがわかります。

第二次世界大戦後には、鯨の肉が食糧難から国民を救う一助となるため、日本を占領したGHQに南氷洋での捕鯨活動再開が認められることになりました。

結果として、白瀬の活動が戦後の食糧難を救うことに繋がつたともいえるでしょう。

最後になりますが、今回の本稿作成にあたり、ご指導、ご助言いただいた関係者の皆様のご協力により実現できましたことをここにご報告するとともに、心から感謝申し上げます。



南極探検船開南丸抜錨記念碑の絵ハガキ

南極探検記念絵葉書(五枚セット)のうちの1枚。
写真左から、三宅雄二郎(雪嶺)委員長・文学博士
/抜錨記念碑/侯爵 大隈信常 記念会総裁

参考・引用文献

- ・我孫子市杉村楚人冠記念館編 2012『我孫子市文化財報告書第4集 杉村楚人冠記念館平成24年夏季企画展解説書 白瀬中尉の南極探検と楚人冠』我孫子市教育委員会
- ・石井香絵 2018 科学研究費助成事業研究成果報告書「明治後期を中心とする油彩画の和洋融合形態の展開と受容」代表:石井香絵 課題番号:16K16754
- ・石田榮雄 1957「白瀬中尉南極探検の外交面」尾形裕康編『学術研究第六号 早稲田大学創立七十五周年記念号』161-183頁
- ・開南探検協会編 1939『開南 大日本帝国南極領有28周年記念講演特集号』南洋開発社出版部
- ・開南探検協会編 1940『開南 科学部隊南極探検発表記念号』南洋開発社出版部
- ・開南探検協会編 1940『開南 南極探検隊濠州野営30周年記念座談会特集号』南洋開発社出版部
- ・小林善七編 1935『灣頭の文化 日本南極探検隊長 白瀬臺記念號』第51號 金浦文化協会
- ・小林康達 2012『楚人冠 百年先を見据えた名記者杉村広太郎伝』現代書館
- ・白瀬臺 1941「日本南極探検の感想」下山鎌吉編『文明協会ニュース日本と世界第176輯』財団法人文明協会 21-28頁

■南極観測の歴史（あゆみ）

日本南極地域観測隊
第51次W 二部 恒美

1950年代後半、日本は「国際地球観測年（IGY）」に参画し、その一環として南極観測に乗り出した。IGYについて64ヵ国が参画し、米国が提唱した南極条約に向け、南極地域の平和的利用、科学的調査の自由と国際協力、同地域における領土主権と請求権の凍結、核実験の禁止などが規定された。白瀬の戦前期の南極探検の実績があったとはいえ、主権回復間もない日本が南極観測に参画し、さらに南極条約の策定に加わったことは、日本の国際社会への復帰を強く象徴するものであった。（*1）

●観測のあゆみ

日本南極地域観測隊暦より抜粋した主な出来事（日本に関する事柄等）（*2）

1910年11月28日	白瀬隊、開南丸（204トン）で東京芝浦を出航
1912年1月19日	白瀬隊、南極大陸に第一歩
1912年1月28日	白瀬隊80°05S、156°37W 到達「大和雪原（やまとゆきはら）」と命名
1956年11月8日	第1次隊東京晴海埠頭を出航（観測船宗谷）海上保安庁
1957年1月29日	第1次隊西オングル島で国旗を掲げ周辺一帯を「昭和基地」と命名 2月15日越冬開始
1957年7月1日	国際地球観測（IGY）開始（1958年12月31日まで）
1958年2月24日	第2次隊、悪天候に阻まれ越冬隊送り込み断念。15頭の樺太犬を昭和基地に残置し帰国の途に就く
1959年1月14日	第3次隊、タロ、ジロ生存確認
1959年12月1日	南極条約採択：原署名国（111ヵ国）
1960年8月4日	日本、南極条約批准（原署名国）
1960年10月10日	第4次隊福島紳隊員遭難
1960年11月14日	第4次隊新山脈へ到達
1961年2月1日	「やまと山脈」と命名
1961年6月23日	原署名国の日12ヵ国批准により南極条約発効
1961年11月10日	第5次隊南緯75度に到達
1961年	第6次観測隊 出発
1965年11月20日	ふじ 第7次観測で就航（海上自衛隊）
1965年12月24日	第7次隊により昭和基地再開
1967年12月14日	第8次隊プラトー基地（米）到着
1968年2月9日	西オングル島西端の露岩上で故福島紳隊員の遺体を

	発見
1968 年 7 月 20 日	プラトー基地（米） -86.3°C 記録
1968 年 9 月 28 日	第 9 次隊極点旅行に出発
1968 年 12 月 19 日	第 9 次越冬隊村山雅美ら 11 名南極点到達（史上 9 番目）
1969 年 2 月 15 日	第 9 次隊南極点から昭和基地に帰着（5,180km 走行）
1969 年 9 月 8 日	昭和基地で最低海面気圧 931.3hPa を記録
1970 年 2 月 10 日	日本隊初のロケット（S-160）観測に成功（11 次隊）
1970 年 7 月 21 日	第 11 次隊、みずほ観測拠点開設
1977 年 1 月 21 日	昭和基地で最高気温 10.0°C を記録
1978 年 12 月 27 日	南極点基地で -13.6°C の高温を記録
1982 年 4 月 7 日	南極の海洋生物資源の保存に関する条約発効
1982 年 9 月 4 日	昭和基地で最低気温 -45.3°C を記録
1983 年 7 月 21 日	ボストーク基地で世界最低気温 -89.2°C を記録
1983 年 11 月 14 日	初代 しらせ 第 25 次観測で就航（海上自衛隊）
1984 年 5 月 7 日	昭和基地に雨が降る
1985 年 1 月 1 日	あすか観測拠点開設
1985 年 12 月 15 日	初代しらせオーストラリア観測船ネラ・ダン号救出
1990 年 3 月 3 日	国際犬ぞり南極大陸横断隊横断達成
1991 年 11 月 4 日	環境保護に関する南極条約議定書採択（マドリード）
1996 年 5 月 27 日	昭和基地で最大瞬間風速 61.2m/s を記録
1996 年 12 月 7 日	ドームふじ観測拠点で氷床掘削 2,503.5m 達成（第 37 次隊）
1998 年 1 月 14 日	環境保護に関する南極条約議定書発効
1998 年 12 月 18 日	初代しらせ、プロペラ故障のオーロラ・オーストラリス号（豪）の救出に成功
1999 年 2 月 15 日	大場満郎南極大陸単独徒歩横断達成
2006 年 1 月 23 日	第 II 期ドームふじ基地氷床掘削 3,028.5m 達成
2007 年 3 月 1 日	国際極年（IGY）開始（2009 年 3 月 1 日まで）
2009 年 11 月 10 日	二代目しらせ 第 51 次観測隊で就航（海上自衛隊）
2010 年 1 月 30 日	日本、南極条約に基づく査察を初めて実施マイトリ基地（インド）など 6 基地査察
2011 年 3 月 25 日	昭和基地に建設された大型大気レーダー（PANSY）の観測開始
2016 年 3 月 12 日	二代目しらせ、強風でモーソン基地で座礁したオーロラ・オーストラリア号（豪）に 3 月 6 日到着。総員 66 名、ヘリ 3 機を乗せて、ケーシー基地まで 2,300

	0 km を大輸送、無事完了させた
2018 年 1 月 6 日	荻田泰永、無補給単独徒歩で南極点到達
2019 年 1 月 16 日	阿部雅龍単独徒歩南極点到達

日本南極地域観測隊の観測活動は、昭和 31 年出発の 1 次隊から数え、現在（令和 3 年 1 月）第 61 次越冬隊と第 62 次越冬隊（令和 2 年 11 月出発）の 2 隊が越冬交代式（毎年 2 月 1 日）、を控え鋭意活動中のこととおもいます。

●参考資料

- (*1、 日本以南極への関与 1910-1963
理想主義/現実主義的国際間の狭間で 友次晋作介 360 頁
- (*2、 南極暦 2020 年



■Epilogue:エピローグ

にかほ市より NPO 白瀬南極探検 100 周年記念会に表題について委託され、110 年前明治の時代に南極を目指した白瀬隊長始め、隊員親族の皆様の所在を追う事となりました。記念館の資料などみますと、探検 70 周年頃に調査した記録のある隊員、あまり資料が残っていない隊員と千差万別です。

近年、親族の方が記念館を訪れてくれた写真など挟んであったりするものもありました。阿部館長は「ご縁あって訪ねて来ました。」と話していただけると大変嬉しく、親族調査の上にも助かるのだが、おそらく一般来館者として名も告げずに帰って行かれる方もいらっしゃる事だろうとのことでした。

2012 年（平成 24 年）には探検隊南極到達 100 周年記念の式典が立川市の国立極地研究所において開催され、参列してくださった方々がいらっしゃいます。その時にご案内したご親族、白瀬記念館と連絡を取り合っている人たち、まずはその時の情報からその後のその人たち、その人たちの次の世代につながっていくようにと、まずはこのたびの調査に至った経緯と、その意義を記した趣意書とともに調査書を郵送するところから始めました。後援会 4 件含め 87 通発送し、回答 52 件、宛て先不明にて返戻 19 件でした。

次の 10 年 20 年と将来を見据えるなかで、親族の皆様にはぜひ子どもさん、お孫さんに「遠い明治の時代に南極を目指した〇〇というおじいさんがいたんだよ」と話してあげてください。そしてぜひ秋田の白瀬記念館にお出かけください。探検隊の足跡、その後の日本の南極観測への道を開いた功績をご覧ください。記念館の立地をお話しますと、実物大の開南丸アスレチックがある南極広場と、春には満開の桜の木々に縁取られる竹嶋潟と、その向こうにそびえる鳥海山が臨めます。

話は変わりますが、過日秋田県立大学の先生方と親しくお話する機会がありました。「NPO 白瀬でこんな取り組みしております」と話したところ、県外出身の建築環境システム学科の I 教授が「なぜ白瀬記念館の建築デザインを手がけたのが黒川紀章氏なのか？」と積年の疑問のようでした。そこで白瀬中尉のお孫さんである白瀬潤氏が黒川事務所に勤務であったご縁により成し得たことで、とお話しすることができたのです。

一市民の私たちにおいても、シンプルでありながら強烈な印象を残してくれる、南極の冰山を模したデザインの記念館は望外の誇りではありますが、建築の専門家の方々においてはやはり黒川紀章氏は名だたるビッグネームなのだと、強く印象付けられたでき事でした。

最後に調査にご協力いただきました親族、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。連絡したご親族の中には、将来的に自ら高齢となることを考慮して、子ども世代に繋げてくださった方もいらっしゃいました。親族調査の趣旨をご理解いただきましたことに衷心より感謝申し上げます。本冊子中における所在地等は個人情報に配慮した形で掲載したことを申し添えます。

NPO 法人白瀬南極探検 100 周年記念会 石井 久美子

■NPO 白瀬からのお知らせ

- 「NPO 白瀬南極探検100周年記念会ホームページ」のご紹介



URL : <https://shirasenobu.com/> Mail : Shirasenobu100@gmail.com



◎サイトメニュー

- **Greetings** : あいさつ
 - ・白瀬艦の生涯と南極探検
 - ・白瀬隊を知らせたい
- **Organization**
 - ・概要
 - ・定款
 - ・役員・会員
 - ・報告
 - ・入会案内
 - ・ご寄付ご支援
- **Activities**
 - ・協力活動
 - ・専門調査委員会
 - ・各種イベント
 - ・会員活動
- **Project**
 - ・白瀬南極探検隊
親族調査プロジェクト2020
- **Document**
 - ・会報
 - ・スクラップブック
 - ・書籍紹介
 - ・保存版
- **Plaza**
 - ・質問コーナー (QandA)
 - ・ギャラリー
 - ・掲示板フォーラム
- **Inquiry**
 - ・問い合わせ

●Team Shirase2021(Facebook Closed Group)



100年以上の時を経て、「白瀬南極探検」は現代に力強いメッセージを届けてくれます。「未知への挑戦」は世界中の全てに共通する歩むべき指針です。さあ、白瀬南極探検のように、ともに「新たな極地」へむかひましょう！このグループは、「白瀬」をキーワードに、興味ある人、思いある人、そして偉業・夢・ロマンを次世代に継ぐ人たちがつながる場所です。

奮ってご参加ください！Shirasenobu100@gmail.com へご一報をください。グループ招待をお送りします。

補足：編集委員紹介

- ★小柳伸光（おやぎ のぶみつ）
- ★齋藤 充（さいとう みつる）
- ★佐藤忠悦（さとう ちゅうえつ）
- ★二部恒美（にべ ひさみ）
- ★石井久美子（いしい くみこ）
- ★石井 護（いしい まもる）



佐藤忠悦委員



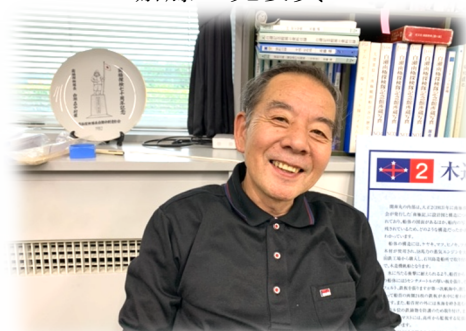
小柳伸光委員



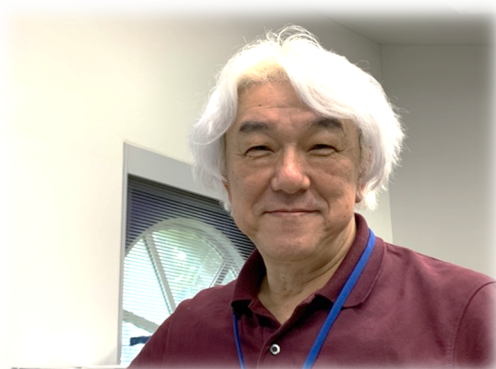
齋藤 充委員



石井久美子委員



二部恒美委員



石井 護委員



↑ 調査票発送作業中 ↓



秋田県にかほ市
白瀬南極探検隊親族調査・交流業務報告書
南極に立った挑戦者たち
～祖先の誇りを永遠に～
令和3年(2021)2月26日 発行

編集・発行者
NPO 法人白瀬南極探検 100 周年記念会
編集委員会

住 所 秋田県にかほ市黒川字岩瀉 15-3

電 話 0184-74-9438

印 刷 製本直送.com

<http://www.seichoku.com/>

NPO-URL【<https://shirasenobu.com/>】

E-mail:Shirasenobu100@gmail.com